

---

# 箱入り娘

うゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

箱入り娘

### 【NZコード】

N9893F

### 【作者名】

うゆ

### 【あらすじ】

「白雪、早く大きくなつて綺麗なってくれよ……なにも分からない白雪と一人の男。白雪を中心に巡る物語。果たして彼女は周りと差異なく育つことはできるのか？

## 第1話：一人の在り方

1

そこは、縦横3メートルほどの畳の部屋だった。

その部屋には実用性に富んだものはなく唯一あるものとすれば、壁際にたくさん置かれたぬいぐるみだった。

壁際といえども壁に窓はなく外からの日光はこの部屋には射さず、代わりに人工的な電球の光が部屋を照らしている。

しかし、その部屋の空気は濁っているわけでも息苦しいわけでもなく、むしろ生活するにあたって適度な温度と湿度になっていた。中央に敷かれた、敷布団。窓のない部屋。部屋を覆うたくさんのがいるみ。

そして . . . その中央に居座るピンク色のネグリジェを纏った人形のようない人の少女。

| . . .

2

どれだけの時間が過ぎたのかも分からない部屋で、少女は何かの存在に気づいたのかドアの方をジッと見つめた。すると、少女の目先のドアがカチャヤリという音を立て、その後ドアがギイという不快な音を立てながら開いた。

少女はそれを待っていたかのように、ドアを開けた一人の男のもとへと駆け寄つて行つた。

男はドアを開いたその場で腰を屈め膝をつき、両の手をいっぱいに

2

広げた。

そして、少女は何のためらいもなくそこに走った勢いで飛び込んだ。

「パパ、パパ、おかえり」

短い単語をつなぎ合わせ少女は男の帰りをひどく喜んだ。

「ああ、ただいま…白雪」

少女はただ男にパパ、パパとそれだけを言い続け、至福の笑みを浮かべていた。

「白雪、じゃあそろそろご飯にしようか」

優しく微笑んだ男は、目の前にいる自分に背の半分ほどしかない小さい少女を抱き抱えダイニングルームへ向かった。

「白雪、今日はペスカトーレとシーザーサラダだよ」

男の表情は先ほどと変わることなく穏やかな表情であった。

「ペス・・ペス・・・?サラダ」

少女はペスカトーレという単語を初めて聞いたのか、その単語をを最後まで言う事は出来なかつた。

しかし、反対にサラダはしつかりとしたアクセントで言えており、その顔からはサラダという食べ物がどんなものか知っているようであつた。

「サラダ、サラダ」

背もたれの長い椅子に座り、またもや同じ言葉を連呼する少女は地面に届かない足をバタバタとさせ、親の餌を待つ雛鳥のよう見えた。

「分かつてゐよ、今作つてるから待つて」

痩せ形で身長が180cm近くある男は手慣れた手つきでパスタを茹で、その合間にサラダの盛り付けを行っていた。

白雪は田の前のテーブルに置いてある、少女と男の2つのフォークを手に持ち、その2つの大小変わらないフォークをぶつけあわせ不協な音を響かせた。

「こりゃ、白雪何やってるんだ、やめなさい」

相変わらず笑顔な男は、いたずらをした白雪を軽く叱つた。

躊躇がしつかりしているためか、白雪は男に言われたことはすぐさまやめ一つのフォークをテーブルに戻した。

そういえばフォークで思い出したが、少し前に白雪はこの時みたいにフォークやスプーンを使う食事の際、自分のフォークとパパのフォークが違うと言つて手をつけなかつたことがあつた。

確かにその時、白雪のフォークはお子様用の小さいものだつた。そのため男はキッチンに置いてある自分とおなじフォークを白雪のフォークを取り換えた。

すると白雪は、男と同じものを使えるからかそれをとても喜んだ。その時、それを見た男は白雪と同じようにとても喜んだ。

そんなまだ思い出といつほど離れていない記憶を思い起こしているうちに大体の調理が終わつた。

「ほら白雪、料理が出来たぞ」

料理を見た白雪は一層足をばたつかせながら、田を輝かせた。

「サラダ、サラダ、・・・ペスカトーレ?」

白雪は先ほど男が言つていた料理の品名を曖昧ながらも思い起つた。だがアクセントは定まっていないようであつた。

「そうだよ、サラダとペスカトーレ」

ゆっくりとした口調で英単語を教える教師のように男は白雪に新しい単語を教えていた。

「ペスカトーレ?」

ぎこちないながらも白雪はまた新しいものを覚えた。

「そう、ペスカトーレ。それでこの細い麺は・・・」

男が最後まで言い終らないうちに白雪はフォークを手に持つて彼をジーフと見つめていた。

「分かつた分かつた、そくだね早く食べよ！」  
その言葉を聞くと白雪はパアと顔に笑みを浮かべた、「いただきます」

白雪は当たり前のよつこわつ言つた。どうやら食事のマナーはしっかりしているようだ。

「どうぞ」

男はそう言つた白雪を優しく微笑みかけ食べるよつに促した。

「ダメ、パパ、いただきます」

ムスツとした白雪は男の方を見て目の前の食事を食べるための手を止めた。

一瞬不意を突かれたかのようが停止した男であつたが、少し時間を要して白雪が何を言いたいのか分かつた。

「あ～、いただきます」

男は慌ててそう言つた。

その途端、白雪は止めていた手を動かしサラダに手をつけた。

近頃、白雪はものすごいスピードで成長しているように感じる。特に心が成長しているように思える。しかし、まだそれは身体的な面には反映されないらしい。

本当に白雪の成長には目を見張るものがある。ちょっと前までは全然話せなくて動き回ることもできなかつたといふのに・・・白雪は真つ直ぐ成長して、綺麗にな人になつて貰いたい。

「・・・パパ、これ」

男はその言葉で思想から現実に戻り、白雪がフォークを持つ手の反対の左手で指す物を見た。

それは、先程男が作ったペスカトーレであった。

男は白雪にスパゲッティを食べさせたことがないという事に気がつき、  
そういうえばといった表情かおで食べ方の手本を見せた。

「白雪、これはね、こうやってクルクルってやって食べるんだよ」

男は田の前の楕円形のお皿に盛られているスパゲッティをフォークで巻き取り口に運んだ。

それを見た白雪は自分のお皿に向き合て男と同じようにフォークをクルクルと回した。

それを持ち上げると、赤みを帯びたスパゲッティは白雪のフォークに少量巻きついていた。

白雪は勿論それを口に運んだ。だが、まだ初めてという事でしつかりと巻きついていられないスパゲッティは、

フォークの隙間から抜け出すようにスルリと白雪の膝の上に落した。

それを見た男は近くのタオルを台所で濡らして、白雪の膝に落したスパゲッティとソースを拭きとった。

しかし、スパゲッティは白雪のピンクのネグリジェにうすく赤いシミを残した。

「パパ、ごめんね・・」

白雪は申し訳なさそうに男に謝った。

「うん、よく言えた。偉い偉い」

男はネグリジェを汚したことを怒ることはせず、やはり優しく白雪がちゃんと謝ったことに對して褒め、

申し訳ないような表情を浮かべている白雪の長く伸び、シルクのように柔らかい髪を左の手でゆっくり撫でた。

「・・・ごめんね

「もういいよ白雪」

男は小さく謝る白雪をゆっくり撫でながらなだめた。

「よし、白雪、パパが食べさせてあげようか?」

そんな謝らなくていいんだよ、と思つた男は白雪にスパゲッティを

食べやせよつとした。

「嫌、白雪がやる」

白雪は自分の力で頑張るつとしていた。今まですぐパパに頼んでいたので、またこれにも男は驚いた。

「偉いよ白雪」

そう褒めると、白雪は褒められたのが嬉しいのか男の方に顔を向けて「イ」と笑った。

そして白雪は皿の前のスペゲッティをフォークで巻き取り、ぎこちないながらもしっかりと口に運んだ。

「おーしい」

「そうか、それは良かつた」

男は、またフォークとは別の手である左手で白雪の紙を撫でた。

「パパ、あーん」

そう言つと、白雪はフォークをお皿に置き、男の方を向いて口を開けた。

どうやら白雪はやっぱり男にスペゲッティを食べさせてもらいたいらしかった。

成長していると思ったが、やはりこの所はまだ幼いのだなとつぐづく思つた。

「分かったよ白雪、ちょっと待つてな・・・はい、あーん」

男のフォークに適量巻きついているスペゲッティを白雪は口を広げて頬張つた。

「おーしい！」

白雪はとても喜んだ。

「そうだね」

男も一緒に微笑んだ、・・・そつ、まるで本当の家族のようだ。

男は当たり前のように白雪のピンク色のネグリジェをゆっくりと脱がして、それを洗濯機の中に放り込んだ。

もちろん白雪は、年齢が年齢なためブラジャーは着けておらず、膨らみの持たない胸があらわになっていた。

そして、男は白雪の肌に着けている最後の衣服であるショーツを、腰を屈めてゆっくりと下ろして行つた。

白雪はそれに命ぜて足を上げ、ショーツはネグリジェ同様洗濯機に放り込まれた。

「一緒に、お風呂」

白雪は浴室の扉を開けようとしていた。

「そうだね、今日も綺麗に洗つてあげるよ」

そう言つと、男は手際よく自分の衣服を脱いでいきそれらを一つ一つ洗濯機に放り込んだ。

「じゃあ入ろうか」

「うん」

浴室への扉が男の手によつて開かれると、白く曇つた蒸気が一人を出迎えてきた。

そして二人は密のようにそのまま浴槽に浸かった。

「・・・ああ・・・気持ちい」

温かい液体が男の体を包み込んだ。

浴槽はさほど大きくななく、白雪と男は向き合つた形で浸かっていた。しばらくすると、男は白雪に浴槽から出るよつに促した。白雪が浴槽から出るのを確認すると男も続いて出た。

「うー、洗つて」

そう言つと白雪は、浴槽のすぐ隣にあるお風呂用のプラスチック製のイスに腰を掛けた。

「はいはい」

男はタイルの壁のフックにかかっているボディタオルを手に取り、すぐ近くに置いてあるボディソープのボトルをプッシュし

ボディタオルを泡立てていった。

それはすぐ泡立ち、すぐさまイスに座っている白雪の背中にあてがわれた。

男が体全体を洗い終ると、次はシャンプーを白雪の長い髪に含ませた。

「田を瞑つて、白雪」

白雪はシャンプーがあまり好きではないのか、田をギュッとしあわへ瞑つた。

白雪の髪は泡で覆われていき、だいたい全ての部分を洗われて泡まみれになつた白雪は、男の手によつて泡を水で流し落された。

「よし、きれいになつた。じゃあもう一回暖まるつか」

「うん」

その後、男と白雪は浴槽でおしゃべりなどを交わし、浴室をあとにした。

4

私の隣で寝息をたててこる白雪、お前は母親のよつて綺麗に育つてくれるだろうか。

私はお前の事が愛おしくて仕方がないよ。最近はお前の成長を見ているのがとても楽しい。

自分で考えて何かを言つたり、行動で示したりして私に何かを伝えよつとする姿。

少し前まではパパとしか喋れなかつたのに、いつの間にかいろんな言葉を覚えていた。

おまえが赤ちゃんの時、最初は何をしたらいいか何も分からず育児専門書を何冊か買って、それを読みふけつっていた。

そしてその後は、紙おむつ、哺乳瓶、粉ミルク、ベビー服、おしゃ

ぶり・・・、いろんなものを買った。

泣いているときは哺乳瓶を口に当てたり、オムツを確認したり等して、後は育児書と勘だけで頑張っていた。

：白雪、早く大きくなつて私を満足させておくれ、早く、早く。  
私だけの君になつてくれよ、君にとつての世界は私だけなのだから。

誰にも君を渡さないよ、拾つたのは私なのだから。

＝＝＝＝＝

そして男は普段と変わらぬまま、大きめのベッドに白雪と寄り添う  
よつにして就寝した。

## 第1話・一人の在り方（後書き）

まだ、お話をあまり書いたことがないので出来はそこそこですが、ここまで見てくださった方はありがとうございます。

出来れば、2話目にすぐに取りかからうと思つのですが、何せ試験が近いものですから

1カ月後ぐらいの執筆になつてしまふかもしません。

その後はたくさん書いていきたいので、どうかよろしくお願ひします。と、いうことであつゆでした

## 第2話・彼女との出会い

そういうえばあれはいつの話だったかな・・・。そうか大体今から6年前ぐらいだったかな。

そうだよ・・・いつの間にか6年も経っていたんだな。  
白雪と会ったのはそんな前だつたが、赤子だった頃が昨日のように思えるよ。

あれは雪がたくさん降っていた時の事だったな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

私は誕生日だというのに独身という身分ながら、やはり誰も祝ってくれないことで、

いつも通り車でいきつけのショッピングモールへと向かっていた。  
今日は、今年の中で一番ではないかというぐらい雪が吹雪いていた。  
そのため私の車の屋根とフロントガラスにはたくさんの雪が積もっていた。

家を出る前にフロントガラスの雪は取り払い、最初のうちは視界が確保できていたのだが、

車に乗つてショッピングモールに向かっている最中に赤信号のためでブレーキを踏んだせいか、

止まつた勢いで車内から見える雪景色は積もりに積もつた雪が屋根からフロントガラスに滑り落ちたことによつて遮られ、暗闇となつ

た。

そのため私は信号が赤から青へと変わる前に、すぐさま車から飛び出し雪を取り払おうとした。

しかしその時、私は対向車が近づいているところに気づかずに車を飛び出したため、目の前には車が迫ってきていた。

なんとか対向車の運転手はぶつかる直前にハンドルをきったため、私は大事には至らなかつた。

だがその代りにたくさんの車は私に向けてクラクションを放つわ、雪を取り払っている間に信号が青になり今度は後の車からクラクションを鳴らされる等、本当に散々であった。

しかし、住宅街に降り注ぐ雪は銀世界を私に見せてくれたようで悪いものではなかつた。

そういうしているうちに私はショッピングモールの地下駐車場に車を止め、入口付近に設置されてる買い物カゴを手に取り店内へと入つていつた。

もちろん私はそんなに料理は出来る方ではないので、冷凍食品やカツ丼ラーメンなどを買い込む。

だが最近では自炊にもチャレンジしているため、基本的な食材も買いい込む。

その理由は簡単だった。テレビ番組でやつていた料理番組で自分でも出来るのではないかという疑問が浮かび、試しにやつてみたところ意外にも楽しかったためチャレンジをしている。今ではそれは趣味のひとつになりつつある。

だが、結果的にはカツ丼ラーメンは好きなためそこは譲れないものがある。

カツ丼ラーメンの種類では、やはり無難にホームラン軒の味噌ラー メンが一番つまないとと思う。

そんな事を考えながら誕生日である今日の夕食の食材を買い込んでいた。

その後はショッピングモール内に設置されている書店に向かい、新作の小説やその少し前の物を何冊か買い込む。

読書も私の趣味であり、独身の私にとって映画鑑賞に並ぶほど楽しいものだ。

書店は思つていたよりも閑散としており、人はまばらにしかいなかつた。

そして私は両手に提げた買い物袋を見つめ、地下駐車場に止めてある車のもとへと向かうのであった。

私が自動ドアをぐぐり抜け地下駐車場に戻ると、外が大雪なため人があまり来ないという予想に反して、

駐車場は色とりどりの車でごった返していた。

もちろん私はそんな事は気にせず自分の交通手段である車のもとへ向かつて行つた。

そして、とても広大な地下駐車場の端に位置する自分の車の元に到着するとやはり隣には車が連なつていた。

別に何を思ったわけでもないが、私は隣の車の車内を見渡した。

その車は普通自動車で車内は私の車と比べると小奇麗な方であった。だが車の後部座席には、なんと小さな女の子の赤ん坊がすやすやと眠つていた。

何を思うわけでもなく私はそれに魅入つっていた。

すると、頭の中に何かがよぎつたような不思議な感覚に襲われた。頭の中の私が駐車場内の自分の車の横に立つている私に向つて何かを囁いてくる。

『この子を家に連れ去つて自分が育てれば、奴隸とひけをとらない

従順な娘になるのではないか?』

だが、良心の私はそれを許さない。

『一〇の子をさらつていったい何があるというのだ、仮にこの子をさらつたとしてもその後はどうする?どうやって誰にも悟られずに暮らす?

どうやって世話をする?結局最後には捕まるのがオチだ』  
しかし・・・、もはや悪魔に魅入られてしまつた私はその欲望に打ち勝つことができなかつた。

無意識のうちにいつのまにか手に提げられていた買い物袋が地面に落下しており、袋の中に入っていた冷凍食品やカップラーメンが散乱していた。

他には8個入りの卵が内用物をぶちまけて、パックの中身をドロドロとした黄身と卵白が彩つっていた。

そして買い物袋を放して何も手にしていない右腕は、既に自分の隣にある車に手を掛けようとしていた。

その瞬間、悪魔の方の私が告げ口をした。

『素手で取つ手を触るんじゃない、そして車内には証拠物資を何も残すな。最後に、近くに防犯カメラがあるかを確認しろ』

舞い降りた悪魔は地獄の業火とはうつて変わつて冷たく、私にとても冷静に指示をくだしていた。

私は何食わぬ顔で辺りを見渡した。幸か不幸か周囲には防犯カメラの姿はどこにも見えず、さらに入れ込ま見えなかつた。

地下駐車場は水をうつたように静まり返つており、私は何の躊躇もなく長袖で覆つた手を車の取つ手に掛けていた。

すると、車は鍵という常識を取つ払つてガチャリといつ音と共にすんなり私の侵入を受け入れた。

車の中は暖房が利いているためか外の温度と比べ適度に暖かかつた。その後の私の行動は素早く、座席やそれ以外の物に手をつけぬよう慎重に赤ん坊を抱き抱え、

扉がガバリと開いている自分の車の中にその子を置いた。

死んだように眠っている赤ん坊はもぢろん目を覚ますことなく私の車の後部座席に運び込まれた。

そして私は辺りを気にしながら先ほどまで赤ん坊が眠っていた車の扉をそつと閉め、散らばっている食材等を袋に書き集めて助手席に乗せると、

私は反対側に回り、運転手席に乗り込んだ。

後ろには何も知らない小さな赤ん坊、今さら私はこの子を元の場所に戻す気はない。ここまで来てしまつたら取り返しがつかないのである。

「じゃあ・・・行こつか」

悪魔が乗り移つた私はそう言い残し、車のキーを差し込み車を発進させた。

住宅街の一軒家に住んでいる私は、肘にだらりと提げられた買い物袋とその先の両手に抱えられている赤ん坊の重みを感じながら玄関前のプレートに記された『坂東』という文字をあとにして自宅へと入つていくのであった。

やはり自宅に入ると安心感が訪れ、先ほどまで不安でいっぱいだったという事を教えられる。

私はすぐさま冷え切つた室内を暖めるため年季の入つたストーブのスイッチを入れた。

そして両手に抱かれた赤ん坊をソファーアームchairに寝かせ、玉子の割れたパ

ツク以外の食材を冷蔵庫に整頓しながら置き、カップラーメンを近くのかっこの中に放り込んだ。

そうしている間にも次第に部屋は暖まつていき、冬の寒さから解放される。

そして残つた赤ん坊を見据え、本当に誘拐してしまつたのだと実感する。

数日後にはテレビなどでも報道されるのだな、と先の事を考えながらふと赤ん坊の靴下の裏を見ると、そこにはひらがな小さく『しづな』と書かれていた。

それがこの赤ん坊の名前なのだろうと瞬時に判断する。同時にこの家で暮らしていくにあたつて名前が必要だなと思つた。

さすがにその名前でこの子を呼んでいくのは抵抗があるため私はこの子の名前を考えることにした。

しばらくした後、外の景色を思い返していくとこんな名前が思い浮かんだ。『白雪』。

安直な考え方だ、ただ、今日の空氣と同化して無くなつてしまいそうな淡い雪がとてもきれいだったからである。今さら自分のセンスのなさに苦笑する。

結果的にこの赤ん坊は『しづな』ではなく今日から『白雪』となつて生まれ変わるのであつた。

今日は私の誕生日であるが、狂つた神のプレゼントはどうやら他人の子供であるこの『しづな』という女の子の赤ん坊らしい。

哺乳瓶を白雪の口にあてがつている手と別の手で、何気なくテレビをつけるとニュース番組がやっており、そこには報道キャスターが事件の内容を語っていた。

『秋田県大仙市内のショッピングモールにて生後8か月の星野静奈ちゃんが何者かによつて誘拐されました。被害者の母親である星野深雪さん証言によると、短時間で車に戻ることにしていたため、車の鍵をかけ忘れてしまったとのことです。そのため車内は荒らされた形跡は一切なく、後部座席に座っていた静奈ちゃんは忽然と姿を消していました。』

検察側も犯人逮捕に向けて現場周辺を捜査している模様です。 . . . それでは次のニュースです』

そのニュースを聞き私はクックツという笑い声をたてた。つまり、検察側もなにも証拠をつかめていないということなのだと私は悟つた。

そしてなにか大きな証拠物資が見つからない限り、警察も大きく出られないだろうと私は踏んだ。

あるわけないじゃないか、私は誘拐にあたつて細心の注意を払って全てをこなしたのだから。

だが、家宅捜索で家に来られたら部屋に置かれている不自然なベビー用品に気付いてお終いかもしれない・・・数年だ、数年我慢すれば世間はそんな事を気にしなくなる。

ただ私は家に赤ん坊がいることを誰にも口外せずに普段通りに過ぎないだけなのだ。

私はこの日に決心した。絶対に捕まらずにこの白雪をわたしだけのため育てる。

そんな中、哺乳瓶をあどけない表情で欲している白雪は男が何に対する笑っているのか分からいでいた。

## 第2話・彼女との出会い（後書き）

1ヶ月あきますと言いつつ意外と速く更新してしまった。  
どうも書きたかったんで、勉強もやりつつですが。  
とりあえず今回は1話の謎を回収していく感じですね。  
この後も風にやつていきたいと思います。

・・・会話が殆どないと書きづらいといふことが分かりました。

### 第3話・葬儀前夜

彼女の名前は・・・・白雪。

彼女はほとんどの時間を光の射さない小部屋で過ごしている。だが結して無理やりそこに入れられている訳ではない、むしろ彼女はその場所を好んでいる。

人工の光が照らす、他の部屋とは一風違つた畳の部屋。ほとんどの時間をそこで過ごしていると言つたが、彼女は保育園や小学校は行っていない。

彼女は知る由もないが、誘拐された身のため外に出ることは許されない。

そもそも彼女は学校や図書館、公園といった公共の場所を知らない。井の中の蛙とはまさにこの事である。

外を知らない、自分が認識しているのはこのＤＫの家の中のみ。そして何故彼女がその場所を好んでいるのかと言えば、この狭い世界で唯一の友達がいるからである。

その友達というのは部屋に数多く存在するぬいぐるみたちのことだ。そのぬいぐるみたちは男の手によつて2週間に1度か2度の頻度で増え続けている。

ぬいぐるみの種類は、うさぎ、ワニ、ライオン、犬、猫等と様々でどれもかわいい姿をしている。

彼女はその全てを平等に可愛がつていた。もちろんそれは男にそう言わされたからである。

彼女はどのぬいぐるみが一番気に入っている、というものがない。それは単に良いぬいぐるみが無いという訳でなく、只動物 자체を知らないのである。

例えば犬のぬいぐるみがあるとして、本物の犬は飼い主に散歩させられたり、ご飯を食べさせてもらつたり、

吠えてみたり、寝てみたりと、さまざまな動きをする。

しかし彼女から言わせてみれば、犬のぬいぐるみは唯のぬいぐるみであつて他のぬいぐるみとの差異は形が異なるだけなのである。

そう、彼女にはやう言つた物事に関する觀念が無い。

それは、男が支配する世界がそつであるからである。

だからぬいぐるみにも可愛いといつ觀念が無い。

男から言わせてみれば可愛いぬいぐるみといつのは彼女の部屋に数多く存在する“それ”ではなく、顔が整いすべすべとした肌をもち、長い髪をした白雪なのである。

「ねえ、ふつ君。あーちゃん、と仲直りした?」

「・・・・・」

ライオンのぬいぐるみ、ふつ君を両手で持つてジッと見つめる白雪。ふつ君の顔の部分が何かに向けられ、微かにライオンの象徴であるフサフサとした毛が揺れる。

ふつ君の向けられた先はあーちゃんのぬいぐるみ、あーちゃんであつた。

「あーちゃん、どう

「・・・・・」

あーちゃんの大きな白い耳の下にある、ひざを特有の黒いつぶらな瞳は白雪に対して何かを訴えかけていたようだつた。

「やうなんだ、じゃあーちゃんと、仲直りしよう

「・・・・・」

白雪は壁にもたれかかつてじるウサギを片手でひょこと持ち上げ、もう片方の手に握られているライオンの頭の前に置く。

「あーちゃんも、りやんとした」

「……」

白雪は「わざの頭とこみつり、耳に部分を軽く触つてライオンに向かって下げる」させた。

「よくできました」

「……」

もちろん白雪以外に喋る者はいない。

白雪はぬいぐるみたちが田分達のようにには喋れなことこの事は知らない。

自分が喋れるのならぬいぐるみたちも話せるのだと思つている。きっと彼女の中ではぬいぐるみたちが楽しげに会話を繰り広げているのではないか？

しかし、それは彼女の知る範囲の言葉でだ。白雪がそつなよひ、ぬいぐるみたちも言葉が繰り接せつなのだね。

「ふう君は？」

「……」

もちろんぬいぐるみであるふう君は何も語らない。

「ま、ちゃんと、して」

白雪は、何か悪い事をした子供を正すようにむづくつと言つた。

「……」

「ちゃんと、して！」

白雪が金切り声を上げた。誰もいないこの家にその奇声を咎める者はいない。

ついには彼女なりの精一杯の力でライオンのぬいぐるみの尻尾と足を逆の方向に引っ張つた。

「……」

痛みなどを感じる感情さえないライオンは普通ではありえない伸び方をしていった。

次第にぬいぐるみの尻尾や足の継ぎ田の糸がブチブチといった音を立てながら切れていくのがわかる。

そして最後にはライオンの尻尾の部分が千切れた。

綿の詰まつた足も糸が切れたためか、本体からだらりとぶら下がっていた。

「壊れた・・・直せない・・・パパ、パパ、直して」  
誰もいないこの家ではその言葉を聞いてここに飛んでくる者はいな  
い。

それすらもよく分からぬ白雪は、「パパ！」と絶叫しながらライ  
オンのふつ脣を振り回す。

ぬいぐるみの形を形成している綿が破れた布から飛び出していく。  
勿論それがなんなのかは分からない。唯の白いふわふわしたものと  
しか認識の仕様がない。

そして白雪は、長いことそうやつているうちの手で掴んでいたぬい  
ぐるみが無残な姿になつているのを見て、動きを止めた。

しかし、これといった感情を持ち合わせている訳ではないのですぐ  
に違う事を始める。

そう、男が帰つてくるまで。

「白雪、ただいま」

男が帰つてくると白雪はいつものよつて手を広げて待つていてる男に  
向かつて飛びこむ。

「パパ、<sup>いま</sup>ただいま」

未だにおかえりとただいまの区別がつかないのか男の言葉を繰り返  
す。

「白雪、じゅうじゅう時はおかえりって言つんだよ」

男は白雪の髪を優し撫でる。

「おかえり！」

「よくできたね」

白雪は満面の笑みを浮かべながら男にさりに抱きつく。

「けどね、白雪」

白雪を焦らすかのように言葉をついで止める。白雪はちょっとした表情で男を見上げる。

「明日は少し遅くなるかもしねない」

「白雪、嫌」

すぐさま泣きそうな表情になる。だが男の表情は一向に変わらない。「今日は父親のお通夜で短く済ませられたんだけど、明日は葬儀だから色々と事情があつて遅くなるかもしねいんだよ」

「オツヤ？ ソウギ？」

白雪は初めて聞く言葉がたくさん出てきたため頭がそれに追いつかないでいた。

「白雪はまだ知らないでいいよ。けど・・・明日は会う人がいるんだよ」

首を傾げてよく分からぬ白雪は、男をその場に残してダイニングに走つて行つた。

「そうだよな・・・分からないよな、明日会つ人なんか。それが自分に関係してるだなんて」

誰もいない廊下に向かつて呟いた声は明日会つ誰かのために消えていった。

ん人がいなくなつていいくのよ。

6年前のあの日から誰だか分らない一人の他人の手によつて私の人生がすべて捻じ曲げられた。

そして4日前、交通事故によつて母は亡くなつてしまつた。

トラックの運転手が不注意によつて、赤信号なのにもかかわらず横断歩道を渡つている計7名に突つ込み

その場に居合わせた母はその事故で死んでしまつた。

母を含めた4名は死亡し、残りの3名は重症の怪我を負つた。

そんな大事故なのにもかかわらず裁判所はその被告人に對して情状酌量の余地があるとし、刑が不釣り合いであつた。

・・・そんなやつは死んでしまえばいいのに。

明日の告別式には一体どんな人が集まるのだろうか。

せめて葬儀の時ぐらいは泣かないようにしよう。今さら落ち込んでいても仕方がない。

葬儀という事は明日はあいつも来るのか、そいつえればここ何年もずっと会つていなかつた。

あいつは結婚したのだろうか？・・・いや、あいつに限つてないか。私の方は、子供を失つた時のショックで長い間心を閉ざしてしまつていつのまにか夫もいなくなつていた。

今では昔に比べれば落ち着いた方であるが、もし犯人が私の前に現れたら確實にそいつを殺すだろう。

ああ、静奈・・・あなたはどこに行つてしまつたの。

生きているか死んでいるかも分からぬといつのは酷すぎる。せめて遺体でもいいから歸つてきてほしい。

警察はもうほとんど動いてくれない、私一人ではどうにもならない。誰か私を助けて。

そして、星野深雪は明日の葬儀のための喪服を押し入れから引っ張り出したのであつた。



### 第3話・葬儀前夜（後書き）

話の輪郭が出てきたような感じなんですが、どうなんでしょうね?  
まだまだ文が拙く分かりづらい表現などありますけど、  
ここまで読んでくださいましてありがとうございます。

次回も頑張るのでよろしくお願いします。

その事を知った時はとても驚いた

誘拐事件については私が起こしたものだが、その当時はそれとは別のある事実にとても驚いた。

事件から数日後、ニュースではその誘拐事件を大きく取り上げた。だが私は、結局警察に捕まることが無く普段通りに生活を送ることができている。

しかし、問題はその事ではなかった。

いつしかニュースには誘拐された赤ん坊の母親が生中継でテレビに映し出された。

そして、全てが繋がった。

その女の名前は星野深雪。旧姓、坂東深雪。

最初の頃のニュースでは彼女という事に気付かなかつた。何しろ彼女は結婚していくて苗字が変わっていたのだったからだ。

テレビに映し出された彼女を見た時、私は目を疑つた。

テレビの中で『娘を返して』と泣きながら懇願している女性。それは、この世にただ一人存在する私の実の姉であつたのだ。

18歳の頃あたりから一度も会つていらない姉。まさかこんな形で彼女を見るなどとは夢にも思わなかつた。

この家ほどではないが、意外にも世界は狭いのだなと実感した。

今日は本当に久しぶりに姉と再会することになる。

・・・今のこの状況と、あの忌々しい過去との誘拐さえなければ仲の良い普通の兄妹だというのに。

とにかく今日の葬式では出来るだけ会話を避ける予定だが、姉の事だからそれは無理なのだろう。

いくら私が異常といつても普通の人に対する感情や表情を偽るなんてことは簡単なのだが、親族となるとそうはいかなくなる。

どんなにうまくやっても、親族という安心感から緊張がほぐれて小さなミスが生じるかもしれない。

これは気を引き締めていかなければいけない。

じゃあ、行つてくるよ白雪。お前の本当の親に会いに。

実家で行われた告別式には、生前母と仲が良かつた人やいろいろな親戚が集まつた。

そして告別式に集まつた人たちには、「あんなにいい家庭を持つていたのに、可哀想に」、

「とても優しい人だつたのになんで」、「一人の不注意が為に」等の事を口をそろえて言つていた。

そして親族である私と姉と父と叔母が集まつた人に挨拶を交わした。私の叔父はだいぶ前に肺がんで亡くなつた。

原因は毎日欠かさず吸つていた煙草だつたらしい、結局死ぬまで吸つてつたんだから仕方がない。たしか銘柄は『セブンスター』だつたけな。

私が高校の時に叔父に煙草を勧められて勢いで吸つたところ、慣れていないためか思いきり咽<sup>むせ</sup>て、それ以来ずっと吸つていな。

告別式では母の写真が入つた額縁を持ちながら、叔母は俯き泣いていた。

たしかに気持ちは分かる、年齢からすれば自分が早く死んでもおかしくないというのに、

子供の方が早く死んでしまうなんて考えもしないからその分辛いんだという事が。

やはり同様に父もとても悲しんでいた、きっと事故を起こしたトラ

ツク運転手の事を憎んでいるに違いない。

普段は穏和な父もさすがにこればかりは許せないだろう。なにせこの世で一番愛しているものを一瞬のうちに奪われたのだから。そんな一人と比べて姉はあまり落ち込んでいる様子ではなかつた。普段通りな表情を浮かべており、何事もなかつたように取り繕つていた。

告別式は一般同様に進行していき、そして葬儀となつた。母は火葬場で火葬されることになつた。

慣れない手つきで太めの箸を使い、火葬され骨となつた母の遺骨を骨壺に納骨した。

骨を取る叔母の手は震えており、その場で立つことがままならないようにも見えた。

そして、事故で亡くなつた母の葬儀が終わつた。

「久し振り・・・まさかこんな形で再会するとはね・・・」  
一段落ついて実家から自宅に帰ろうとした私に向つて姉が呟いた。  
「あ、ああ・・・たしかにな」  
「何年振りかしら、私達が会つのは」  
冷めた目で同じく呟いた。

「さあ・・・何年だつたかな、たしか高校のときだつたかな」  
「・・・そういえばそつだつたわね、将ちゃん」  
久しぶりに呼ばれた昔の呼び名に懐かしみを覚えた。  
「ゆきねえ、その呼び方はやめろよ。もういい大人だろ。」「そつかしら、そつちも『ゆきねえ』つて呼んでるけど?」  
私はたしかにそうだというような表情を浮かべた。  
「ごめん、けど深雪とか深雪さんとか呼ばれるのも変に感じないか?」

私はさつきまで持つっていたブラックコーヒーの蓋を開けた。

「いや別にそれでもいいわよ、なんかどうでもよくなつてきただしさ」

「そりなんだ・・・」

姉の性格が少し変わつたことに一種のもやもやを感じ、手に持つた  
ブラックコーヒーをグイッと飲んだ。

「へえ、あんたもそういうの飲むようになったのね。ちよつと前ま  
ではオレンジジュースだったような気がしたんだけど」「  
前言撤回すべきだらうか、実際の所姉の性格はあまり変わつていな  
かつた。

「オレンジジュースついでいつ頃の話だよ。・・・といつかさあ・・・  
死んじまつたな母さん・・・」

その言葉によりその場の空気がやや濁つた気がした。

「そうね・・・本当に・・・事故を起こした運転手を殺してやりた  
い気持ちだわ」

姉の目には鬼気迫る殺氣がこもつていた。それに圧倒されたか、私は黙り込んだ。

「けどさすがに殺しはしないわよ、そんな事したら私まで警察に連  
れてかれちやうからね。でも・・・」

「静奈を誘拐した犯人だけは本当に殺してしまいそう・・・」

その犯人が私といったら彼女はどんな表情を見せるのだろう、なん  
の躊躇いもなく私を殺すのだろうか。

それとも警察に連れ出すのだろうか。兄妹という理由から見過され  
てくれるだろうか。

様々な思考が私の頭の中で溢れかえつていた。

「なんだ・・・そういえばまだ静奈ちゃんは見つかっていない  
だよね」

我ながらなんと白々しい事を言つているのだろうと思つた。

「そう、本当に死んでいてもいいから帰ってきてほしい」と今でも思  
つてゐるわ。けどやつぱり生きていてほしい

誘拐犯が誘拐した子供の母にその事について質問するなんてことな  
どこを見渡しても私だけなのではないだろうか。

「・・・静奈ちゃん、生きて帰つてくるといいね」

「ありがとう、でも警察はもうほとんど動いてくれない・・・だから私が犯人を見つけようと思っているの」

姉は右の拳をギュッと握りしめてそう言った。

「一人でかい？それは結構大変なんじゃないかな」

「たしかにね、じゃあんたも手伝つてよ」

ここにきて予想外の事態が起きた。誘拐された子供の母が誘拐犯に向かつて助けを求めたのだ。

「犯人探し・・・大変かもしれないけど出来る限りの事は手伝おうかな。なんたつてゆきねえの命令だからね」

姉はフフと笑顔を見せた。

「ありがとうね、頼りにしてるわよ」

「けど、今から犯人探しをやつて果たして犯人は見つかるのかな」

私は飲み干したブラックコーヒーを片手で軽々潰した。

こう見えて力には自信があり、少なくとも並の社会人と比べれば力がある方である。

「そうね、けど私は今からでも遅くないとと思うの」

「たしかにね、少なくともまだ静奈ちゃんが生きてる可能性はあるわけだし、犯人自体は悠々と暮らしてるだろしね」

私の言つたことは嘘ではない、全て事実なのだから。

「出来れば明日から協力してくれないかしら、休日だから空いてるでしょう」

「うん、協力するつもりだよ。けど、大の大人に休日暇でしようつて決めつけるのも失礼な気が・・・」

私は軽く苦笑した。

「だってそうでしょう、結婚してないわけだし、誰かと一緒にいるわけでもないんだから」

結婚していないという事には否定はできないが、少なくとも一人では暮らしている。

「はあ・・・ゆきねえはズバズバ言いすぎだよ、そんなことしてる

と男が逃げるよ」

その直後私はしまつたという顔をし、口を手で覆った。

「男が逃げて悪かったわね、どうせ私は毒舌女ですよ」

姉は私から視線を外して言い放った。

「ごめん、悪気はなかつたんだよ。許してくれよ」

少し笑いを含みながら姉に頭を下げた。

「しようがないな、じゃあとりあえず明日から頑張つてね」

姉はそう言い終えると私とメールアドレスの交換をしてスタスタと帰つて行つた。

嵐のような姉との会話を終えた私はそのまま家に帰宅しようとが、玄関近くに立つていた父に止められた。

「将太、出来るだけ深雪の力になつてやれよ。ああ見えて深雪はな、本当はすぐ弱いんだ」

父の表情がいつにもましてさらに寂しげに見えた。

「分かつてるよ父さん、出来るだけ頑張るよ」

「頼んだぞ」

父は絞り出したような声で言った。

「父さんもあんまり無理しないでくれよ、もしかんかあつたらすぐこつち来てやるから」

「ああ・・・」

父は呻いたのか分からぬいような低い声で応えた。

「じゃあ、さよなら」

私は出来るだけ笑顔で振る舞い実家を出た。

閉めたドアの向こう側では父はきつと泣いているんだろうなと思つた。

た。

---

そして私は電車を乗り継ぎ自宅に到着した。

「白雪、ただいま」

そう言って玄関の扉を開けると白雪はすぐさま部屋から飛び出しつきた。

「パパ、ただ・・・おかげり」

「えらいえらい、よく言えたぞ」

そう言って靴を脱ぎながら白雪の頭を撫でる。

「ねえ、パパ、ふう君直して」

白雪は所々千切れたライオンのぬいぐるみを私に突き出しつきた。少し前にもこういったことがあったのでその事態に慣れほど驚かはしない。

「こら、またやつたのか、この子が可哀想だからこなことしきゃだめだよ」

「だつてふう君が、ふう君が」

どうやら何かあつたらしげがそれは置いておくれ」といってや。

「じゃあパパが直してあげるね」

「うん」

途端に白雪は上機嫌になつた。

私は、裁縫は得意というわけではないが、そんなに苦手とこいつわけでもないのでこうこうしたことは何とかできる。

「じゃあご飯でも食べようか、白雪」

私はキッチンに料理を作りに行つた。

「ねえ、パパ」

白雪が下つ足りずの声で私に**轉る**。

「どうした、白雪」

特に何もないうが白雪の頭をなでてやる。

「パパ、何でも直せる?」

白雪が珍しく、唐突に不思議な事を言い出した。

「そうだな・・・白雪の物なら全部直せるかな」

微笑みながら白雪の髪をくしゃくしゃする。

「パパ、すごい。何でも出来ちゃう」「うわ

白雪は魔法使いを見るような眼で私を見た。

「ハハ、そんなすごくなじよ。白雪もこいつかそうなるよ」

「ホント? 白雪もなんでも出来るの?」

私の手を振り切った白雪の目はとてもキラキラしていた。

「きっと出来るよ」

「うん」

私は白雪を抱きかかえて、何年と一人で寄り添いながら寝て いる寝室に向かつのであった。

## 第4話・葬儀当日（後書き）

なんか不思議な感じで4話が終了しました。

未だに文章的におかしな部分があると思いますが、これから頑張つて改善したいとおもいます。

第5話も頑張るので、出来れば次回も見ていてください。

そして、明日は高校の試験日なので頑張つてきます。

では、また今度。

## 第5話・姉との会談

今日、私は昨日葬儀の際に久しぶりの再会を遂げた姉と最寄りのアミリー・レストランで落ち合う事になっている。

メールアドレスを交換したため、昨日の夜にメールを何通かしてそう決まったのだ。

だが、姉はメールを嫌がっていた。普通女性は電話よりもメールの方を好んでするものだと思っていたのだが姉は違ったようだ。そんな理由から次回からは電話での会話となつた。

しかしまた、姉も行動が速いものである。久し振りに再会して後日には犯人探しを手伝わせるなど普通はしない行動である。

普通ならばその事についての憎しみや哀しみを延々と語つた後、暫くして事件についての概要を相談し、

その信頼できる人を協力させるものだというのに。

そもそも、その誘拐事件の犯人である私をその独断の捜査に協力させることが第一の間違いである。

姉にはしっかりとした洞察力や直感を持つてもらいたいものだ。だがこうなつてしまつてはその捜査とやらに協力しなければならない。

下手をすればボロが出る可能性があることから、姉には早いうちの捜査を諦めてもらいたい。

お互いのためにだ。いや、得をするのは私だけか。男はニヤけながら黒っぽいセーターを着込んだ。

「待つたかい？」

私は店に入り、テーブルに頬杖をついている姉に尋ねた。

「あ？、ああ、そんなには待つてないよ」

私が店に来たことが分かると姉は頬杖をついていた左手を足元に下ろした。

「ハハ、ゆきねえはあんまり変わつてないね。昔からビックで待ち合わせする時は必ず先に居て、

絶対に『そんなに待つてない』って言つてたよね」

私は昔の記憶を掘り返した。

「そうだったな、まあそんな昔の事は覚えてないよ」

疲れたような声で姉は記憶を濁した。

「そうか、そういうえばまだここ来て何も頼んでない？」

なにも並べられていないテーブルを見渡しそこにしきついた。

「ただけど・・・何か頼もうかしら？」

「いや、料理はまだよそつかな。けどここ長く居座るだらうからドリンクバーぐらいは頼んでおこうかな」

姉はそれもそうだなと呟き、テーブルの端に設置されている呼び出しベルに手をかけた。

途端に店内にピンポンという音が響き、店の隅に設置されている細長い電光掲示板のに17という数字が点滅した。

まだ昼食前で客が少ないためかすぐさま店員が私達のテーブルに歩みよってきた。

その後店員はテーブルの呼び出しボタンを少し長めに押していた。

「はい、注文をどうぞ」

元気のよく通った声で、160cm弱ぐらいの可愛いめの店員がオーダーをとった。

「えつと、じゃあとりあえずドリンクバーを一人分」

その注文に怪訝な顔を見せるわけでもなく、その店員は機械的に言葉を返した。

「かしこまりました。コップの方はドリンクバーコーナーに置いてありますので、」自由にお取りください」

そう言つとその店員はキビキビと歩いていき厨房に消えて行つた。

私はしばらくその厨房の出入り口を眺めていた。

「へえ、あんたああいうのが好みなんだ」

すかさず姉の鋭い一閃が突き抜ける。

「えつ、いやそう言つ訳じやないよ。ただしつかりしてゐな・・・みたいな」

私は慌ててその事についてを弁解する。

「こひいう人たちはみんなしつかりしていふでしょ。それとも何、あの子は特別仕事が丁寧だつていうの？」

姉はテーブルに掛けている指先でタンタンと規則正しくリズムをとつた。

「あ、いや、どうだらうね・・・じゃ、じゃあとりあえず飲み物取つてきます」

私はその場を逃げるよにドリンクバーコーナーへと向かつた。少し離れた所にあるドリンクバーに行くと、すかさずプラスチック製のコップをとりその中に氷を入れた。

やはりチーン店なだけに飲み物の種類は普通であった。

そう言えば姉に飲み物の種類を聞くのを忘れたが、きっと昔から飲んでいたサイダーなのである。

そう思つて私はそのボタンを押した。透き通つたサイダーはコップに注ぎこまれ、シュワフという音と共に泡を発生させた。

もちろん私は「コーラ派であるために迷わずそのボタンを押した。

姉のいるテーブルに戻ると、私はコップをそつとテーブルに置いた。

「ああ、ありがとう」

姉は当たり前のようにサイダーを口に運んだ。

どうやら飲み物の種類はこれでよかつたらしい。

「それじゃあ本題に入るけど、いいかしら?」

姉は「コーラをじごくじごくと飲む私を冷たい目で見た。

「あ、いこよ。で、まずは静奈ちゃんのことだよね」

「そう、静奈の事。誰かがあんな事をしたのかについてね」

姉は遠くを見ているよつであつた。私の自宅にいる白雪を見るかのように。

「まずその事だけど、静奈ちゃんが連れ去られた現場には何か犯人に繋がる手掛かりみたいなものはなかつたのかな？」

姉は頭の中の記憶を呼び起し一呼吸置いて言つた。

「その事なんだけど、警察の方が言うには何も無いそつなよ。唯一あるとすれば、コンクリートに付着していた卵の黄身だそうよ」  
たしかに、私はあの日、卵のパックを落として卵を割つた記憶がある。だがあれからはどうやっても私にたどり着くことはできない。  
「卵の黄身か・・・それじゃ手掛けとは言えないかな。何かこれといったものがあるといいんだけどな」

私はまた「一ラの「ツップ」に手をかけた。

「そうね、けど証拠は全くと言つていいほど見つかってないのよ。  
駐車場の防犯カメラは作動していたらしいんだけど、  
映像を流しつばなしにしていて録画をしていないためか、これといった証拠が残つていないよ」

姉は眉間に皺を寄せて悩ましい顔をした。

「そうなのか・・・ほんとに何か小さなことでも手がかりはないのか」

私は姉を手助けする心の優しい弟を演じ切つていた。

「けど、警察の調べでは男という事は特定できているらしいの  
その言葉に私の臉がピクンと反応する。

「へえ、警察もすゞいね。<sup>あぶた</sup>けど、それは確たる証拠があつて言つてることなのかな。それとも単に誘拐されたのが女の子だからかな?」  
私はとりあえず警察側がどこまで把握しているか、情報を聞き出そうとした。

「いや、なんでも車の取つ手についていた衣服の纖維から男物の服  
とこうのが分かつたから、そう断定したらしいの」

私はなるほどといった風にその時の事を思い浮かべた。

「そこまでできるのなら警察側は犯人が分かつているんじゃないかな？」しかし、ある理由から犯人に手が出せないとか

私はテーブルに置かれているコーラを体に飲み下した。

「たぶんそれはないとと思うわ。けどある理由から手が出せないっていつのには興味があるわね」

思ったよりも姉の思考は冷静であった。心を熱くさせる何かを失つてしまつたかのように。

「例えば、犯人が絶大な権力を誇る弁護士の息子であつたりとか、はたまた有名な医師の息子であつたりとかね」

「確かにそういうのもあり得るかもしれないけど・・・たぶんありえないわね」

「その根拠は？」

私はコップに入つてゐる氷を普段通りに噛み碎いた。

「根拠か・・・なんていうのかしらね、女の勘つてやつかしい」

私が思うに姉は、女の勘というよりも坂東深雪個人の勘が元々鋭いのだと思つた。

「まあたとえ話であつて本当とは限らないけどね」

「そうね・・・そういえばあんたの家に警察は来たかしら?」

いつの間にか私の呼び名が『あんた』に変わつてゐることに違和感を覚えた。

「えへっと、たしか來たはずだつたよ。けど少し話したりしただけで終わつたけどね」

そういうえば、私が誘拐事件を起こして警察が私の家を訪ねてきた。警察もまず初めに疑うのは、親族しかいないからである。だが先に手は打つておいたので白雪は見つからずに済んだ。

「やっぱり血が繋がつていてるから調べに行つたのかな。ナビツチの家族じやそんな事をする度胸がある奴はいないわよね」  
姉は愉快そうにケラケラ笑つた。

「そんな事言つくなよ、そんなに弱つちく見えるか?」

私はあくまで演技に徹していた。

「そうかもね、体格は置いておくとして、少なくとも肝つ玉はちっ  
ちやく見えるわね」

そう言つと姉は今まで手をつけていなかつたコップに手をかけた。

「ほんとゆきねえは毒舌だよな」

苦笑いしながら本音を洩らした。

「そりだつたかしら、あんまり昔の事は覚えてないわよ・・・あの  
事を除けば」

急に姉の顔が険しいものに変わり、テーブルの周りの空気が何度も下がつたように感じられた。

もちろん私には姉の言つているあの事というものを承知している。  
「あの事ねえ・・・出来れば、それについては控えてほしいかな」  
そんなに奇麗な思い出という訳でもないので出来ればその事についての話は避けたかった。

「何言つてんの、けど今はさすがに抑えが利くのかしらね」

「あ、いや、そうだろうね。本当にあの時はどうかしてたのかな」  
私は冷たい姉の前でただ笑うしかなかつた。

天下の誘拐犯も実の姉の前では蛇に睨まれた蛙のようであつた。

「まあ、そのことはまた今度話そうかしらね」

そう言つと姉の表情が元の姉に戻つていた。

「あつ、そうだ、そろそろ料理でも注文しない? ちょっとお腹減つ  
てきちゃつたんだよね」

私は既に呼び出しがれに手を掛けっていた。

「そうね、時間的にもそろそろ何か頼もうかしらね」

姉も承諾したことなので私は呼び出しがれのボタンを押した。  
すると、思つたよりも早く店員が駆け寄つてきた。

それは先ほど自分達の所に来た可愛い店員さんではなく、バイトで  
急遽入ってきたような男子高校生であつた。

「はい、えつと・・・ご注文をどうぞ」

まだ経験が少ないので発した言葉には不安が含まれていた。

「じゃあ、この//カラ//とハムのピザと・・・姉さんは何にする?」

姉はページをめくつ、ある料理を指さした。

「私は採りたてのこのスペゲッティ」

「そう言つと店員は品名を繰り返した。

「それでは繰り返させていただきます。//カラ//のハムのピザ

が一つと採りたてキノコのスペゲッティでよろしいですね?」

「はい」

高校生の店員は今回ばかり話すことができた。

やはり他の店員同様、この店員も厨房へと通えて行った。

「あつ」

私はその事に気をとられていてある事を忘れていた。

「どうしたの?急に」

「そういえばピザにWチーズを付けるのを忘れてたわ

その後は、他愛のない談笑で終わり、この相談は別の日に持ち越されることになった。

はあ、姉の事は置いておくとして白雪の今後はどうしたものか・・・  
最近は物心が付き始めたから、もう始めてもいいものかな。  
私は白雪の成長を一番の楽しみにしている、それはもう親以上の愛情になつていてる。

白雪は物事の良し悪しは分かつていなかから何かを教えるのはとて

も簡単だ。

だから白雪、お前は私の愛玩人間になつてもううよ。

カナリア

## 第5話・姉との会談（後書き）

……、どう見てもサイ リアです。

ところが、今日は一人の会話をのみです。

もつ少し延ばす予定だったのにも関わらず短くなりました。

あまり量がありませんがここまで読んでくれてありがとうございます。

次回も頑張るんでもう今度。

## 第6話・ある日の朝食

1.

私は秋田県のある民家で生誕した。

正確には父親と叔父と叔母と助産師に見守られて母親に出産された。自宅出産に関しては母親たつての希望であつたのでそう決まつたらしい。

だが、その時はなかなか出産に立ち会ってくれる助産師が見つからなく、

病院での出産を決めようとした矢先についに現れたのでなんとか自宅での出産になつたらしい。

しかし問題はここからだ・・・

どうやら私の父親は、私を生むことを反対したらしい。

今私のから言わせてみればお前が妊娠させたのがいけないのだろうと言つてやりたい。

今の時代避妊の道具など普通のお店でも売つてゐるくらいなのだからそのぐらいは責任を取つてもらいいたいものである。

そんな事はさておき、私の母親はそんな父親と反論を繰り返していった。

父親は私の母親に対して中絶、つまり人工妊娠中絶を勧めたが母親はそれを断固拒否したらしく。

一時期は離婚の話題も出たらしが結局その事については父親はなんとか思いどおりだったそうだ。

しかし人工妊娠中絶をしても構わない22週の期間に近づいてくるや否や父親は半ば強制的に病院に連れて行つた。

母親はそのとき必死に抵抗したが子を授かっている一人の女の力では男の力には勝てなかつたようだ。

だが、母親は男の隙を見つけてなんとか病院内から外へと抜けだし

た。

しかしそこで母親は妊婦としてはやつていけないとをしてしまった。

なんと階段から転落したのだ。

大抵こんな事をしてしまえば赤子はおろか母子共々怪我を負う。もしくは赤子、つまりは私が死ぬ。だが奇跡的に打ちどころ良かつたためか私はいつもして元気に生きている。父親の憎悪を孕みながらだが。

そのため私は幼少時代の頃から幾度となく父親の暴力を受けていた。

今となつては思い出となつて残つてているのだがその種類は数知れない。

今ではそれをまとめて虐待といつのことだと分かった。いや本当はもつと前から知っていたのだが。

暴力に関しては至つてシンプルなものが多かつた。

主に殴る、蹴る、叩く等の暴行が多く中でも一番きつかつたのは煙草の吸殻を腕や背中に押し付けられることだった。

父親は思つたよりかは抜け目がなくそういう事をあまり田立たない程度で済ませていた。

しかしその微々たる虐待も幼少時代の私からすればとてつもない恐怖の毎日である。

傷があからさまに残つていれば他の誰かが気づき何か手を差し伸べてくれると思つていた。

しかし夢は夢でしかなくそんなことは私に訪れなかつた。

光は私を照らしてくれなかつたのである。

よつて私は光が照らさないまま暗い所で生きていたのだ。

私の可愛い白雪。お前はもつともつと綺麗になってくれ。  
男が私の正面に立ち、言った。

白雪ちゃん。僕達とずっと遊んでよしね。  
周りにいる人形たちが私に囁いた。

「…私の大事な」 「あなたはどうこ  
いるの。今いつたい何をしてるの？

いつまでも待っているから帰ってきて。お願ひ。

私の知らない誰かが私に訴えかけてきた。  
顔はもやもやしていてよくわからない。だがそんなに嫌な感じはし  
なかつた。

私も知りたい。あなたが誰なのか。

白雪は横で寝ている私をどうこうするわけでもなく、掛け布団を掻  
んでガバッと起床した。

半分覚醒しつつあつた私は、その音で完全に覚醒し目をゆっくりと  
開いた。

私の横では白雪がびっくりした顔で目覚めていた。

私は布団から腕を出し、目をこすつた。

「どうした白雪？」

「怖い・・夢・・・怖い」

どうやら白雪は悪夢を見たそうだ。だがそれは今日に始まったこと  
ではない。

こういったことは以前からあり、そのたびにこんな会話が行われる。  
しかしそれは毎日起くるというわけでもない。大概是1ヶ月に1度  
くらいの周期で起こり、酷いときは週に1回ぐらいだ。

「また夢か・・・白雪、平氣だよパパがいるからね」

「パパ・・・怖いよう・・・」

私は白雪を抱いて頭を撫でてやつた。白雪自身も短い手をこっぽいに広げて私の腰をぎゅっと抱きしめてくれた。

「もう大丈夫だからね」

優しく白雪の髪を撫でてやる。

「うん・・・」

白雪は力いっぱい私を抱きしめてきた。

やはりどんな生き物といつにとも恐怖といつものは付き物らしい。ほとんど知識がなからうが恐怖といつものは、生物の本能によってくるものらしい。

例えば猿なんかにしてみても、自分の身に危険を感じれば高い声で鳴きものすごい速度でその場から逃げようとする。

それでもうひとつ例を挙げてみると、世界に4億匹いるといわれている犬もそういうことがある。

つまり知識と感情は完全にイコールでは結ばれないという事だ。だが、私が思うに感情と本能は完全にイコールであると思われる。こんな白雪でも感情だけはちゃんと一人前に身に付いているのだから。

「じゃあ白雪、朝食でも食べようか」

白雪を抱いていた手を放して布団を足元に払いのける。

白雪はまだ恐怖心が残っているのかなかなか私から離れなかつた。私はその状態でしばらく白雪の傍にいてやつた。

「よし、じゃあそろそろ食べようか」

私がベッドから足を投げ出すと白雪は頷いてベッドから降りた。

そしてベッドから降りた私は扉を開け、まだ寝起きのため動きが鈍いのか重い足取りでキッチンへと向かつた。

白雪は椅子に腰を掛けており私はいつも通りに籠から食パンを取り出していた。

「白雪、今日はどの味がいい?」

「こりゃ」

即答であつた。そう言えば最近朝食でのジャムはイチゴ味しか食べていなかつたような気がする。

私は一つ溝のあるトースターに食パンを入れ、食パンを焼いている間にマーガリンを冷蔵庫から取り出した。

「そういえば白雪、何で最近はイチゴジャムばかり食べるんだ?」  
「これは先程の疑問だつた。

「うーん、白雪、イチゴジャム好き」

最もな意見であつた。たしかに何度も食べるといつ事はそのジャムが好きという事だ。

「そうなのか、それと白雪。今日は新しい友達を連れてきてやるからな」

新しい友達といつのはそのままの意味ではなく、もちろん白雪の部屋に数多く存在するぬいぐるみのことだ。

「本当? 新しい友達」

「ああ本当だとも、楽しみにしてね」

「うん」

そしてちよづびよべトースターがチンといつ音を上げて、先程入れてあつた食パンがトースターの溝から半分ほど顔を覗かせていた。私はこんがりとキツネ色に焼けた食パンにマーガリンを塗りつけた。食パンの表面ががテカテカをつやを見せ始めた辺りで私はジャムの蓋を手をかけた。

ジャムの蓋は最初に開けた時よりかは簡単にパカッと開いた。ジャムの中に入叉を突つ込み食パンにそれを塗りたくつた。

私の方にもジャムを塗つたが白雪の食パンと比べると薄く塗つたつもりだ。実をいつとあまりジャムは好きでないのだ。

「よし・・・白雪、できたぞ」

そう言つて、テーブルの上にイチゴジャムで赤く彩られた食パンの乗つたお皿が置かれた。

「こちーじ、こちーじ」

白雪はお皿を手をとり食パンを両手の指先で持つた。

だいぶ前に手の全体で持つたら熱く、手を火傷しかけたことがあって以来同じ轍てつは踏まなくなつた。

「いただきます」

白雪の手にした食パンがカリッとこう音をたてて小心翼こごひて口の中に

入つて行つた。

「美味しい」

私も白雪を食べるのを見送つた後トーストを口に運んだ。口の中では甘いイチゴがバターの為り替わりであるマーガリンに包まれて胃に落ちて行つた。

私は玄関に立ち、外への扉に手を掛けていた。

「じゃあ白雪、出かけてくるよ」

「お友達連れてきてね」

後ろで白雪が言つた。

「うん」

そう言つて私は外に出た。

玄関先に止まつてゐる白のシボレーの鍵を開け車に乗り込んだ。教習所ではマニユアルだったが、今の時代となつてはやはりオートマチックが一番楽だということなのでもちろんこの車はオートマチックだ。

さて、そんな事はさておき今日は姉の希望で姉の家にお邪魔することになった。

そのため私は姉の住んでいるアパートに向かつている。

少し前までは一軒家に住んでいたのだが、夫と子供が居なくなつた家で住むというのは辛いということで、家を売つぱらいとあるアパートで一人暮らしを始めた。

今となつてはその原因は私というのが明らかだ。

私が、赤子であったときの白雪、つまり姉の子供の静奈ちゃんを誘拐したことによつてすべてが崩れたのだ。

子供誘拐されたことにより夫婦は仲違なかたがいを始めて、とうとう離婚。そして今この現状があるということになる。

姉に私が犯人だといつたら間違いなく私に対してもう言つだらう。  
『人の皮を被つた悪魔』と。

しかしこれは妄想でしかなく本当はそつとは限らない。もしかしたら何も喋れなくなるのかもしれない。

何が起こるかわからない。だから楽しいんだよ人生は。

## 第6話・ある日の朝食（後書き）

すいません・・・今まで一番短いです。

どうも風邪気味っぽいので動けません。

という事で次の試験が近い中、受験勉強との両立を頑張り更新して  
いきます。

見捨てられなければ幸いです

## 第7話・暴りの雨時

1

私は毎日のように父親から虐待を受けていた。だが唯一の私の救いは母だった。

母はそんな私を見かねて父親を説得せたり、私を庇つたりと本当に光であった。

だが逆にいえば父親はそれをも包み込む闇であつたという話だ。

いつしか私は父親からの虐待に何も感じなくなつていった。

しかし、父親が母に暴力をふるつた時は、私の中ではそのことへの憎しみが渦巻いていた。

いつかこの父親を殺してやるわ。私はそう思つた。

私の見方に立つてくれる母のために。

2

外の景色を見ながら姉のアパートに向かつていた私は今、そのアパートの前にいた。

アパートの外装は汚いという訳ではなかつたが、逆に綺麗という訳でもなかつた。

そして急に姉の部屋に押しかけるのは悪い氣がするのと、車をどこに止めればいいのかを聞くために姉に一通電話を入れる。

電話をかけると手に携帯を持っていたのか、すぐに姉が出た。

「もしもし」

『もしもし、もう着いたの?』

「うん、今アパートの前にいるんだけどどこに止めればいいか分かんないんだよね」

『ああ、車のことか。車は別にアパートの前に止めておいていいぞ。』

』

「そんな事していいのか？ほかにも住んでる人いるだろ、迷惑になるんじゃないか？」

『いいんだよ別に、それと私この大家さんと仲いいし』

なるほどといったように私は誰もいないその場で頷いた。

「そりなんだ。じゃあ前に止めておくわ。それと今から中に入るけど、入つていいかな？」

『いいぞ。準備も何も私の家はいつでも人が入つてきていよいよになつてるから』

言つてる意味がよく分からなかつた。とりあえず私はシボレーをアパートの前に移動させ、

サイドブレーキを入れてエンジンを止めた。そして姉の住んでいるアパートに入つて行つた。

姉の部屋は204号室で2階の端の方にあるらしい。

私は小奇麗な階段を上がつて2階に行き204号室の前まで来た。204号室の前の傘立てにはどこにでも売つてゐるようなビニール傘と、黒のナイロン製の傘が立て掛けであつた。

最近使用した形跡はなく、ただそこに置かれていた。

そして私は204号室の扉を開け、中に入った。

「お邪魔します」

靴を綺麗に揃えて脱いだ私は、その奥にある扉に手を掛けた。

木製の扉はギイという音を立てながら開き、その中には水色のパジャマ姿の姉が座つていた。

「久し振り。つて言つてもまだそんな経つてないか」

姉は軽く手を挙げてこつちを見た。その部屋は畳の部屋で、真ん中に座つている姉を見ていると、白雪が畳の部屋で座りながらぬいぐるみと遊んでいるのを思い出した。

「そうだね・・・7日ぐらいかな？」

「そんなもんだったかな」

姉は私を座るように促して台所でお茶を入れ始めた。

「で、ゆきねえ。何で今日はここに呼んだのかな？」

姉は急須に入れたお湯をお茶の粉入った湯呑に注いでいた。

「なんだろうね、なんとなくかしら」

そして姉は湯呑をちやぶ台に似たテーブルに置いた。

「・・・何か情報つかめた？」

遠慮なく私は差し出されたお茶に手を付けた。この寒い時期に暖かいものは必需品である。

「いや、特にこれといったものはなかつたよ。やっぱり今からの捜査は難しいのかな」

これといって何も調べていない私がそういった。

「やっぱりね、今からはなかなか調べられないものね・・・」

「そうかもね」

ズズズという音を立てながら飲んだお茶は湯呑の半分まで下がつていた。

「ねえ、なんで誘拐とかをするのかしら？」

一瞬自分対して言われたのかと思い驚いたが、数秒遅れてそれが誰だか分らない複数の人に向けての言葉と分かつて落ち着いた。

「いきなりなんだよ。けど、あんまりそういうこと思つた事がないからよく分からんな」

「そう、私が分かつてる事は、そういつ犯罪者は狂つてるとしか表現できないわ」

その言葉には犯罪者である私でも少しカチンときた。

「それはちょっと違うんじゃないかな。だって犯罪者っていうもピンからキリまでいるのは当たり前で、

しかも世の中には自分はやってないのにも関わらず本当の犯人に犯罪者に仕立てられて刑務所でその人に代わりに罪を償つている人もいるからね」

姉の表情が少し険しくなる。

「けど、犯罪者は犯罪者でしょ。悪い事をやつたことに変わりはないわ」

「たしかにね、犯罪を犯したから犯罪者の訳で悪い事をやつたのは事実だ」

「でしょ。けどなんで世の中には悪い事をしたのにも関わらず誰にも咎められずに悠々と暮らしている犯罪者がたくさんいるのよ」

姉の表情が一層険しくなる。だが私の表情は至って冷静だ。

「そうなんだよね、警察に捕まらない犯罪者も中にはいるんだよね。しかも法律には時効っていうのがあって15年を過ぎるとその罪はなくなるんだよね」

警察に捕まらない犯人とはまさに私の事だ。

「なんで?なんで15年が経てば罪がなかつたことにされるのかしら・・・やつたことはずっと残り続けるって言うのに」

「法は絶対だからその事は曲げられないんだよね」

私はテーブルに置かれた湯呑を持ち、完全に混ぜ切れていない粉の事を気にして湯呑を軽く回した。

「私の友人が昔こんな事を言つてたわ、『どんなに長い年月が経とうと、被害者の傷は絶対に消えない。しかし世間からは忘れ去られる』と」

「・・・もしかしてその友人もなにか事件に」

私は素直な気持ちで姉に訊いた。

「ええ、両親が殺されたって言つてたわ」

「そりなんだ・・・・」

「何でも大学生の頃、休日にいつも通りにアルバイトをしていて夜遅くに帰宅したところ、

家の中の一室が血で染まつていてその部屋の中央で両親が死んでいたそななの。

そして母親の方は心臓が一突きで即死らしかったんだけど、父親は体中が切り傷で埋め尽くされていて最後に包丁が心臓に突き刺さつて死んだらしい」

「あつ、それだけ前にテレビで見た。そういうえば犯人は捕まつて今も刑務所にいるんだつたつけ」

一瞬姉の顔が歪んだが、また話を続けた。

「残虐性が高いというのにもかかわらず死刑にならず、将ちゃんが言つたように今も刑務所の中。

ついでに言つておくとその友達は今でもその犯人を憎んでいるらしいわ」

「そりやそうだよな。まだ社会人にもなつてないのに両親をいっぺんに奪われて何も思わないはずがないよな。

ましてや、まだ犯人が生きてるなんて」

私は両手を軽く挙げてオーバーリアクションをとつた。

「で、今は私と同じように一人暮らしをしてる」

「へえ・・・そうなんだ、やっぱりまだその時の傷が残つてて人と話すのが怖くなってるのかな。ようするに対人恐怖症?」

「あんた最近ズバズバ言うようになったのね。本人に行つたら間違いないくブチ切れるわよ。・・・

けどたしかにその事件のせいで彼女は人と話すのが怖くなってるわね」

たしかに今のは失言がつた気がする。しかしそれは昔からだ。

「そうなつちやうもんなのかな、意外と脆いんだよね人つて」

「そうかもしれないわね、私だって一時期どんだけ壊れたことがあつた事やら」

姉が少し苦笑いをする。

「・・・けど今はなんとか戻つてこれたよね。まあ人は壊れやすくもあるし治りやすくなるのかな」

「どうなんでしょうね」

姉の苦笑いが笑いに変わった。

「それと話が変わるけどさ、今度静奈ちゃんが誘拐されたあのショッピングモールまで言つてみない」

「それは遠慮しておくわ、あそこは行きたくないんだよね。なんかあそこに行くとすぐに気持ち悪くなるんだよね」

私は粉が沈殿しかけた湯呑をまた回した。

「やつぱりゆきねえもちょっととトラウマがあるんだ」「うーん、トラウマっていうか体が拒否するんだよね」

「姉は初めて自分のお茶を啜つた。

「体がねえ・・・まあそういうもんなんじゃないのかな?むしろ普通に行けた方がおかしいのかもね」

「窓から見える雲行きが怪しくなってきたのが分かる。通に行けた方がおかしいのかもね」

「そうなのかな、分かんないや」「ゆきねえ、最近なんかあつた?」

私は唐突にどうでもいいような事を聞いた。

「いきなり何よ。そうね、最近は何かあつたかしらね。・・・えつ」と、そういうえばこの前いつも通りにお店で働いてたら

見知らぬ男の人が私の事ジロジロ見てきてなんか気持ち悪かつたかな」

本当にどうでもいいような話だった。

「へえ、そういうえばゆきねえは今はお店で働いてるんだ?それとジロジロ見てたのはゆきねえが変な格好してたか、奇麗だつたからじゃない」

「あつ、嬉しいこと言つてくれるな将ちゃんは。けどお世辞はやめときな」

姉は軽く笑つて流した。

「そんなことないよ、ゆきねえは奇麗だよ。前からね」

外の天気は今にも姉が降りそうに状態になつていた。

「全く何言つてんだか・・・だからあのときはあんな事したのかな・・・?」

姉の微笑を含んだ笑みが私には少し怖かつた。

「・・・だからあの時は話はあんまりしてほしくないんだけどな。・・・けどあえて答えるんなら、そうなのかもね」

まだ私が高校生の頃の姉は私からすればとても魅力であった。

「なんだ。じゃあ聞くけど、今はどうなの?」

「えつ、・・・そうだな・・・」

私は目を下に泳がせていた。

「まだそういう感情があるのかな」

姉がさらに私に追い打ちをかけてきた。

「どうなのはよく分からぬけれど。意外とそういうのかもしれないかな」

私はここで答えるのはいけないと判断したのか少し言葉を濁した。

「じゃあ、今からあの時の再現でもしてみる?」

いつの間にか外では田ではつきりと見える程度の雨が降っていた。

「だからあの時はどうかしてたんだって」

姉は私の言動を振り切ってパジャマのボタンに手をかけていた。

「別にいいじゃないの、そんなに減るもんじやないでしょ」

「その言い方だと少しさは減つてると思つよ」

姉は、上から一つめのボタンを外し終えて二つ目ボタンに手をかけていた。

「だからやめていい・・・はあ、そんなこと聞かないか・・・」

「そうよ、本能に従つちゃいなさいよ、そうしたら楽になるわよ」  
姉の服はほとんどはだけで、今では白いブラジャーとそれに隠れる豊満な胸が見えていた。

「どうするの、するの?しないの?」

一見2択に見える質問であつたが、姉がひとつ目の選択肢を隠してい るようにも見えた。

「しかたないな・・・どうせゆきねえはあるつて言わないと家から返さないんでしょ」

さすがの私もそれに従う事にした。

「正解、しないつて言つたらここから出さない予定だつたから」

姉は満面の笑みを浮かべていた。

「つまりここに呼んだ本当の理由つて・・・」

「違うわよ、これはただの気まぐれよ。本当になんとなくなのよ」  
姉はボタンをすべて外した服を脱ぎ棄てて、ズボンに手を掛けてい た。

「ほら、あんたも脱ぎなさいよ。私だけ脱いでたら馬鹿みたいじゃ  
ないの」

「けど寒いじゃん」

「すぐに暖かくなるわよ」

そう言いつと姉は部屋の隅に寄せられていた布団を引っ張り出してテ  
ーブルを退かした。

「ほら、早く脱ぎなさいよ」

姉の身に着けている衣服は上下同じ種類のショーツとブリーフジャー  
だけであった。

「じゃあ寒いから布団に入つてね。準備がすんだらきてね」

そう言いつと姉は布団に潜り込んだ。

どうしたものか・・・これはもつ逃げられないらしい。つまり、今  
から起きることは近親相姦か?

いや一人の同意があるからそつとは言わないのか。だが私が白雪と・  
・まあその話はもつと先かな。

私はセーターを脱ぎ、ベルトを外した後にジーンズのホックを外し  
ジッパーを下ろしてジーンズそのものを脱いだ。

そして姉が潜り込んだ掛け布団を剥ぎとり、姉のいる布団に入つて  
行つた。

「ねえ将ちゃん・・・昔のこと覚えてる?」

至福の笑みを浮かべた姉が私に問いかけた。

「昔つていつぐらいのこと?」

姉がいつぐらいの事を指しているのか私には分かつていた。

「私が大学生ぐらいの時で将ちゃんが高校生の時かな」

「・・・うん、覚えてるよ」

私は姉を抱きしめた。先ほどと同じように。

「あの時は楽しかったよね」

そんな私を姉は抱き返してきた。

「そうだね、なんにも考えないでいたからね」

「じゃあその時の話でもしようか」

姉は僕の方に向き直った。顔が近いためか姉の温かい吐息が私の顔にかかる。

「別に構わないよ」

「じゃあしよう」

そして私達は軽くキスを交わした後、長い長い昔話が始めた。

## 第7話・轟の歴時（後書き）

今回も誤字や脱字がある可能性があるので、あつたらすこません。

なんだかんだいって7話になりました。

ここまで見てくださいつていう皆様方本当にあつがとうござります。

2月10日・すいません。誤植があつたので修正しました。

## 第8話…とある過去の過去

1

僕は素直に姉が好きだった。壊してしまいたいほどに。

だがそれは許されない、なぜかと聞かれれば僕達は兄妹だからである。

だが時にそれすらも無視して姉に手を掛けようとする僕がいる。だが人には理性があるように歯止めが利く。だが僕はそれすらも壊そうとしていた。

ゆきねえはどうしたら僕を見てくれるの？

2

「・・・しょ・・・ちやん・・・起き・・」

夢の中にいる僕に向つて誰かが話しかけてきた気がした。

「将ちやん、起きて」

夢から現実に引き戻されるにつれて頬に痛みを感じる。

「ほら、早く起きなさいって！」

姉がついに僕の掛け布団をばぎ取つた。

そして僕は目を覚ました。それに伴い右の頬がジンジンしていた。きっと姉が私を起こす際に頬を叩いたのだろう。

「あんたいつまで寝てんの？ 今日ははどうかいくんでしょう。・・・またく

僕は姉のその言葉の意味を、寝ぼけて処理スピードが遅くなつた脳を出来る限り素早く動かし理解に勤しんだ。

「えつと・・・なんだっけ？」

結局私はその答えを見つけ出す事が出来なかつた。きっとその部分だけが欠落してしまつたのだろう。

「はあ？ あんたそんなことまで忘れちゃったの。あんなに楽しみにしてたのにさ・・・もしかしてアルツハイマー病？」

酷い言われようだった。それと、『あんな楽しみに』という言葉で頭の中の何かが引っかかった。

「アルツハイマーって・・・僕に言わないでくれよ。アルツハイマー病患者の人失礼だろ。

けど知つてた？ そういうのを差別つて言つのだよ、ゆきねえ」

処理の遅くなっている頭でも悪口を叩くような機能は果たしているようだった。

「ああそですか。じゃあそんな」と言つながら今日は行かなくていいよね

姉が僕に向つてにっこりと微笑んだ。

私は頭でその事が分かつていなくても体が何かを記憶しているのか咄嗟に言葉が出た。

「ごめんごめん、行くよ・・・じゃなくて行かせてください」

僕は目ヤ一を落とすために目を擦つた。行動と返事が矛盾していた。

「分かつた、しうつがないないなあ将ちやんは。けどどこに行くかは分かつてるよね？」

痛いところを突かれた。あくまで反応したのは体であつて、その返事を返す頭は無いようだ。

「ええと・・・ゴメン分からぬ」

僕はすぐに考えることを諦めた。それが無駄だと分かつたからだ。すると姉はニコッと微笑んだ。それが純粋な笑みではないのは僕には分かつていた。

「分からぬんだ、正直だね将ちやんは・・・けど自分で言つたことぐらいは覚えておこうね」

姉がいつの間にか拳を握つていた。そしてそれが何をするために握られているのかはもちろん僕には分かつていた。

「ごめんなさい」

姉は最小限の力で強いダメージを与えたいらしく、地味に痛い弁慶

の泣き所、つまりは脛を殴りつけた。

瞬間痛みが体を突き抜ける。そして痛みがきっかけで忘れていたことが頭を過ぎた。

「あっ、思い出した。そういうえば楽器屋に行くんだったよね

「そう・・・別に私は行きたいわけじゃないんだけど、

将ちゃんがどうしても一緒に行きたいって言つからそれについてこうとしてるんじゃない」

最初の方は呑つてるとして、『どうしても一緒に行きたい』ということには記憶がついていけなかつた。

ただ私が忘れているだけなのか姉が勝手に作ったのかそれは分からぬ。

「どうしてもね・・・そんな事言つたかは分かんないけど、今日は行くからね。忘れててごめんね」

膝を押さえながら僕は笑つた。姉はまったくといった表情をした。

「まあいいか。じゃあすぐ用意してね」

「分かった。けど、朝飯まだなんだけど・・・」

僕はそう言いながら時計を見た。そして自分の言葉に後悔した。

「何言つてんの?もう1時だよ。あんたが起きるの遅いんでしょ」

たしかに外を見るとかなり口が上がつていて、いい陽気だつた。

「じゃあ昼食は外で食べればいいのかな?」

「もうあんたコンビニとかで買ってくれば?私もう昼食も済ませてあるから」

今さら気づいたが、姉の恰好はいつものパジャマでなく外着用の服にチーンジされていた。

「えつと・・・ということは僕は今から顔洗つだの歯を磨くだのして服を着替えればいいんですね

妙な敬語に切り替わつた。

「そういうこと、じゃあ下で待つてるから早くしてね

姉はドアノブをガチャリと回して部屋から出て行つた。

「ゆっくりしてたらまたゆきねえに怒られるな・・・」

そう呟くと僕はすぐ行動にかかった。

僕はまず洗面台に洗顔と歯磨きをするべく向かった。水を流すと冷たい水が出てきた。いくら春だかと言つてもさすがに冷水はきつい。しかし、我が家の水はお湯になるまでに時間がかかる。

その水がお湯になる前にまず僕は歯磨きをした。これは単にお湯で口を灌ぐのが嫌だったからだ

そして歯を磨き終わつた僕はぬるくなつたお湯で顔を洗つた。僕はそのお湯で完全に眠気が吹つ飛んだ感じがした。そして見るからに安そうな石鹼を使って顔を洗つた。眠けから覚めるというのはこういうことなのだな。

そして僕が次に行うべく行動は着替えだつた。

別にファッショնにはあまり興味がないので、いつも通りに下がジーンズ上がTシャツにパー カーを羽織つた格好だ。

全ての行動が終わつた僕は後ろポケットに携帯と財布という軽装備で、姉のいるだらうリビングに向かつた。

僕の予想に反して姉は玄関に立つていた。

「遅い、もつとテキパキ行動しなさい。といつかもつと早く起きなさい」

「ごもつともな意見だつた。

「ごめん、それともう準備できてるからそろそろ行く?」

「そろそろつて、全部あんた待ちだつたんでしょうが」

完全に僕の失言だつた。今日の僕の12星座の運勢はきっと最下位に違ひない。

「確かに・・・とりあえず行こうか」

「しようがないな、じゃあ行こ」

そう言つて姉が外に出ようとするとコビングの扉が開いて父が出てきた。

「深雪、気をつけていってちらしゃい。それと将太もな」

完全に僕があまけみたいな言い方だつた。

「分かつた、じゃあ行つてくるね」

「行つてきます」

一応報復のためにそつけなく言つてみたつもりだ。しかし実際の所普段と変わった感じがしなかつた。

僕は姉と下り電車で3つ田の所にある楽器屋に向かつた。

「一人とも仲が良いな、今時の兄妹でこんな仲がいいのは滅多にないかもしだんな」

父が母に言つた。この家には今一人しかいない。

「そうですね。しっかりと育つてくれて、生んだ甲斐がありましたよ」

「そうだな。本当によく育つてくれた。これからも仲良くしてもらいたいもんだ」

父は母に笑いかけた。母はまつたくだという表情をした。

「仲良く・・・な・・・」

「よし、着いた」

僕は起きた時のテンションと比較すると数段高かつた。起きたと言つても昼なのだが。

「まったく調子いいんだから。けど、なんで兄弟そろつて行く場所が楽器屋なの。そもそも兄弟つて一緒にどこかにいくものなの」言われてみれば兄妹でどこかに行つたという事はあまり聞かない。しかしそんな事を気にしてはいなかつた。

「そりや楽器類が見たかつたからに決まつてるじゃん。どりあえず入ろうよ」

僕はお店に入つて行つた。

お店の中にはそこそこ人が入つていたが、休日という事を考慮するに当たり前の入り具合だった。むしろ少ない気がする。

「そんなに混んでないみたいね。じゃあ私はそこのへんに座つてゐるから」

姉は音楽にはあまり興味ないようでボーつとしていた。

僕はそんな事を気にせずにギターの機材のコーナーに向かつた。

少し前まではメタル系にハマっていて低音重視の曲を練習していた。そのためディストーションを使っていたわけなんだが、最近はゆつたりしたのもいいかなという事でバラード調な曲にも挑戦している。そういうた理由からクリーンの音を出さなければいけないわけだけど。

何せ今まで歪み系のエフェクターしか使っていなかつたので、コーラス等のエフェクターを持つていなかつた。

普通は何をやるにしてもそのぐらいは持っているものなのだが、自給の低い高校生のバイトではなかなか懐が狭い。

つまりお金がないためずっと買えないでいたのだ。しかし最近やつとお金が貯まつたので買いに来たのだ。

エフェクター自体は以前ここにギターを持ってきて試奏をしたので事前準備は万全だつた。

僕がエフェクターを見ていると店員さんが近づいてきた。

「試しに音を聞いてみますか？」

男性の店員さんは二ツ口リと微笑みながら聞いてきた。営業スマイルといつやつだ。

しかし先ほど言つたように以前試奏を済ませてるのでそんな必要はなかつた。

「あ、結構です」

そう言つと店員は「何かお試しになるなら近くの店員に声を掛けてください」と言つて去つて行つた。

とりあえず僕はそこを後にしてギター本体のコーナーに向かつた。

一度ベースもやってみようかと思ったが、高校生の経済力ではギタートベースの両方をやることは無理だつた。

そして今僕はギター歴3年ということで、それなりに弾けるレベルに達していた。

しかし未だにスワイープは出来ないでいた。だが別にそれを使う曲

はやつていないのでそんなには問題にならなかつた。

一番使いどころない技はエイトファインガーだと思うが、本当にあれは必要なのかと思つた。

僕は壁から吊るされているギターを眺めていた。

目を引いた、ギターはParkerのギターだつた。あのギターを見ていると折れるのではないかといつも思つてゐる。

あのギターはとても軽いのだが、ネックが細い上にボディまで薄い。あれを作つた人をすごいと思う。

というより値段も凄かつた。本当に高校生じゃどうにもならない値段だつた。

そして次に僕に近づいてきたのはお店の店員ではなく姉だつた。

「将ちゃん。もう飽きたんだけど

「早いんだね」

田をキラキラ輝かせる僕と違つて姉の田はどんよりしていた。

「もうここ出たいんだけど。早くしてくれない?」

姉が急かしてきた。特にこれと黙り居する理由はないので僕はエフェクターのコーナーに向かつた。

そして近くの店員を呼んで「これ買つんでしょうかお願いします」と言つた。

僕がそう言つと店員は「はい」と笑顔で言つた。今度は女性の店員さんだつた。まだ若いようで、かなり可愛い風貌だつた。

店員は店の奥に消えて、しばらくしてエフェクターの入つた箱を手にして帰つてきた。

「こちらの商品でよろしいでしょうか?」

僕が「はい」と頷くと、すぐに会計が行われた。

僕は姉が後ろにいる中、財布から5千円札一枚と千円札3枚、そして小銭を出して会計を済ませた。

「あんた結構お金持つてるだ」

姉がにやりと笑つた。その瞬間、姉は絶対僕にたかるだろうと判断した。

「どうせお金持つてるんなら何か奢つてよ」

予想的中、どうせその後は服の飯かのどちらかがくるんだろう。

「無理無理、そんなにお金持つてるわけじゃないんだ」

「いいじゃん、服とか買ってよ」

またしても当たった、どうも今の状況は援交してたかられてるおやじの気分だ。

「だから無理だつて。飯ぐらこはいいけど」

「ホント? ジャあマックでも行こう」

横暴すぎる、姉には遠慮というものを知つてもらいたい。

「マックって、ゆきねえは昼食食べたんじゃなかつたつけ?」

「いいんだよ、おやつみたいな感覚で食べるから」

「・・・太るぞ・・・」

僕は姉に聞こえないように小さく呟いた。しかし姉にはその声が届いていたようだ。

「悪かつたわね太つて、これでもカロリー計算はしてるんだからね」

「はいはい分かってます、じゃあとりあえずマックでも行こうか。昼食食べてないし」

今思つとマックに行こうと提案した理由は、

僕が昼食を食べてない事に対する配慮だったのか単に自分が食べたかったかは分からなかつた。

「よし行こう」

姉は足早に楽器屋を退散し、田舎では信じられないような雑踏の中、近くのマックに向かつた。

僕は壁際の二人用テーブルの椅子に腰を掛けていた。

時間的にはもう昼食を過ぎていふといふのに会計の前ではまだ短い列ができていた。

そして姉は、自分の注文と僕の注文を頼むためにその列に並んでいた。

僕はあまりお腹が減つてないのとお金の支出を抑えるためのノーマルのハンバーガーを2つ頼んだ。

姉は、確かビックマックを頼むだとか言っていた気がする。それはおやつという量でないのは確かだ。

そして姉が僕の財布をそのまま持つていったのが謎だった。最悪の場合にお札が抜かれている場合がある。

そんな事を考えていると姉がトレイにハンバーガーやビックマックを乗せてやってきた。

「買つてきたよ。労働量で500円頂戴」

ちゃつかりしたやつだ、だがその程度の労働でお金をあげる気はなかつた。

「嫌だ、それに値するような事してくれればあげるけどね」「めんどくさいから嫌だわ、まあとりあえず食べよつ」

姉はビックマックの箱に手を掛けて、ビックマックが崩れないように食べていった。

僕は片手でひょいとハンバーガーを持つて口に運んだ。味はもちろんハンバーガーだった。

「そういえば今日は何買つたの？」

姉が突然聞いてきた。

「えっ、今日はギターのHフレクター買つたんだけど」

「ふ〜ん」

あまり突つ込まないところを見ると、それが何なのかよく分からないう�だ。

「よく分かつてないみたいだね」

「うん」

やはりそういうらしい。といつか即答であった。

「じゃあなんで付いてきたんだよ」

「暇だからだよ」

姉はビックマックを食べる手を一向に止めない。もう既にビックマックの半分が姉のお腹に収まっていた。

「暇つて、どこかに一緒に行く友達とかいないのかよ。一応現役大学生でしょ？」

「現役大学生と友達どこかに行つて遊んでるっていうのは『』で結ばれないんだよ。知つてた？」

それは初めて聞いた。大学生は自由なハッピーライフだと思つていたのに。

「それって友達がいないって意味なの？」

言つたあとに気づいたが、人として最低な質問だつた。

「失敬な、友達はいるに決まつてるでしょ。どこかの引きこもりじやないんだから」

「じゃあ僕も言つておくけど、引きこもりと友達がないは『』で結ばれないんだよ」

下手に出ている僕が不思議な反撃を実行した。

「なんかよく分からないわ、けどただ私は暇なだけなんだよ」

「じゃあ一応聞いておくけど、彼氏とかつていてるの？」

このことについては前々から興味はあつた。ただ聞くタイミングなかつただけだ。

「彼氏？ああ、彼氏ね。私はいないよ、人と合わせるの苦手だから。けど、あっちが私に合わせてくれるなら付きあうんだけどね」

「へえ、そなんんだ」

それは僕からすれば驚きだつた。なぜならば姉はとても奇麗だからだ。あくまで僕の視点だが。

「じゃあ聞くけどついでに聞いておくけど。今狙つてる人とかいるの？」

ついでというより正直なところそれが本題であつたのだが。

「狙つてる人ねえ・・・特にいなかな。別にそう言う人いたつてどうにもならないし」

どうも姉は普通の女子大生とは少しずれているようだ。

しかし姉に思ひ人がいるのは驚きだつた。本当にいなかは定かではないが。

「そりなんだ。ていうかもう食べ終わつたんだ」

姉はいつの間にかビックマックを全て食べ終わつていた。

それに比べて自分は今までの話に気をとられていてまだ一つ目を食べ終えたところだった。

「あんた遅いね。もう帰っちゃうよ」

姉は席を立とうとする仕草を見せた。

「ちょっと待つて、すぐ食べるから」

僕は慌てて二つ目のハンバーガーを口に運んだ。そのせいで口元に赤いケチャップが付いてしまった。

「慌すぎだよ。まだ行かないからゆっくり食べな

「ごめん」

僕はその後ゆっくりハンバーガーを食べ始めた。ゆっくりといつてもハンバーガーは4・5口程度で食べ終わつてしまつた。

「じゃあ食べ終わつた事だし、そろそろ行こつか

「そうだね」

僕はトレイに乗つたゴミを捨てるべくゴミ箱に向かつた。トレイを傾けるとハンバーガー包んでいた残骸はゴミ箱に吸い込まれていつた。

「じゃあもう帰ろつか

自動ドアが開いて僕達は店の外に出た。外は変わらず人でごつた返していた。

「「ただいま」「

家に帰ると僕と姉は同時に帰りを告げた。

「おかえり」

ドアを挟んだ遠くのリビングから小さく声が聞こえた。

「よし、じゃあ早速試し弾きでもしようかな」

僕は先ほど買ったエフェクターを持つて2階に向かつた。姉も僕に続いて階段を上がつてきた。

「じゃあ暇だから、それでも見てようかな」

僕の後ろにいる姉は僕の部屋に付いてくるようだつた。僕の部屋に。「いいよ、別に。けどまだ練習も何もあつたもんじやないからまともな曲は聞けないよ」

「そのときはメタル系でも聞かせてね」

自室の扉を開けるとやはり姉も続けて入つてきた。そして僕は姉が部屋に入った後に扉に鍵を閉めた。

「じゃあ、簡単にセッティングしてと・・・」

「ちゃつちゃとやつちゃつてね」

それには少し怒りたくなつた。ヴァイオリンの奏者なら完全に激怒するだろう。それは偏見か。

「はいはい」

僕は手慣れた手つきで黒いシールドをアンプ、新しく買つたコーラスのエフェクター、ディストーション、ギターの順で繋いでいく。

「よし、終了」

姉は僕のベッドで寝転がり、携帯や財布を枕元に置いた。姉が横になる時に髪をかきあげる仕草がとても色っぽく見えた。

「じゃあ適当になんかやって」

姉は僕と反対の方向を見ながら手を振つた。つまり僕の手元は全く見てないという事だ。

「なんかやつてつて・・・まだそつと曲練習してないからできなんだけどな」

そう言いながら簡単なコードを押さえ、ギターの弦を鳴らす。厚みのあるクリーンな音がアンプから流れた。

「だからメタル系やつてよ」

姉ははゴロンと転がりこつちを見つめてきた。慌てて僕は視線を軽くそらした。

「しょうがないな・・・けど人に見られながら練習するのも嫌だからそつちやうかな」

僕はコーラスの電源を落してディストーションのペダルを踏んだ。ペダルを踏み込むと先程どうつて変わって歪んだ音がアンプから流

れた。

「じゃあ適当に頼むよ」

適当に流す姉に対して、僕は簡単なリフを弾いた。

「ネックベンド、ネックベンド」

姉が僕のトラウマを口こじた。

まず最初にネックベンドというものはネックを無理やり曲げて音程を変化させるハイリスク・ノーリターンの荒技だ。

何故その単語がトラウマになっているのかと言うと、

僕が高校2年生の頃に文化祭のイベントで調子に乗ってネックベンドを行なった時に力を入れすぎたためかネックが折れてしまったからだ。

さらにはそのライブは台無し、ギターも粉碎され最悪の過去となつた。

「もうあれはやらないよ。あれのせいだギターと人の信頼を失つたからね」

「あっ、ごめん。そこまでへこむのか・・・」

姉に言われたように僕の顔には不気味な笑みを浮かんでいた。

「まあ普通には弾いてあげるから・・・ハハ・・・」

僕はやけくそになつてギターを弾き鳴らした。しかしそれはすぐに終わり、僕は手を止めた。

姉がきょとんとした顔を見せた。本能と言つのは困つたものだ。

「ねえ、ゆきねえ・・・」

「ん? なに」

姉がまた僕を見つめてきた。

「えっとね・・・」

「何、早く言つてよ」

姉は軽く笑つて見せた。

僕はギターの音を消さない状態でスタンドにストンと置いた。そして姉のベッドに近づく。

「そんな怖い顔してどうしたかったの? ていうかギターは放置して

いいの?」

ギターは不協和音を部屋中に反響させていた。僕は姉の寝転がつているベッドのすぐ横に立ち姉を見おろした。

「今ギターはいいんだ。それよりもさ・・・」

僕はベッドの真ん中あたりに腰を掛けた。

「それよりも・・・何？」

僕はゆっくりとした動きで姉に跨った。<sup>またが</sup>姉がびっくりして一瞬体を震わせた。

「え、将ちゃん何やつてんの?ほら早く降りてよ、重いじやん」

姉が苦笑交じりに僕をどけようとした。しかし僕は微動だにしない。「そういうえばわ、わつきマックにいた時ゆきねえ言つてたよね。500円が欲しいって」

姉は少し考えるそぶりを見せて言つた。

「・・・そういうえば言つたね、それがどうしたの?」

顔が軽く引き攣つた姉が尚も僕をどけようとする。

「じゃあ500円上げるからその分簡単な労働でもしてね口元が笑っていた僕であったが完全に田が笑つていない。

「え?どういう事、それって・・・」

姉が質問してくるものだから僕は行動を示した。

「こりいうことだよ」

僕はベッドに倒れこみボタン付きのシャツの上から姉の胸を揉んだ。

「きやつ!?なにするの?やめて」

僕は姉の言葉が耳に入つていなかつた。ただ欲望のままに姉を蝕んだ。

「やめてつて言つてるでしょ!」

姉が叫ぼうと防音工事をなされたこの家では誰に耳に元届かない。それが届くのは同じ部屋にいる僕だけだ。

しばらくの間姉の胸を揉みしだいた僕は姉の股間に辺りに手を這わせた。すると姉が「キヤツ<sup>ヤ</sup>」という声を出した。

「ねえ将ちゃん。今止めるなら怒らないから。お父さんとお母さんにも言わないからさ」「

そう言いながらも、ものすごい力で僕をベッドから落そうとした。

姉の抵抗は虚しく、男子高校生の力には及ばない。僕は姉のジーンズのベルトに手をかけた。

「キヤアッ、やめて！」

ベルトを外し終えるとホックに手を掛けてジーンズを姉の膝のあたりまで一気にすり降ろした。

僕は白のショーツの上から姉のソレをまさぐった。

「怒らないからさ。やめてよ・・・」

姉の抵抗がだんだんと弱くなつていいくのが分かった僕は、姉のボタン付きのシャツを無理やり引っ張り胸をさらけ出した。

僕は姉の胸に舌を這わせた。

「あっ・・・」

姉の体がビクンと反応した僕はそれを見かねてさらにその行為を続けた。

坂道を転がった石は誰に止めることができない。別の誰かが手を差し伸べなければ・・・しかし、それを止めるべく人は現れなかつた。徐々に加速していく石は最後には坂の最後に到達し、動きを止めた。

その後、姉は結局誰にもその事を話さなかつた。私の将来を考えてどううか？

いや、そうではない。ただ私が怖いだけなのだ。

そして姉は長い間心を閉ざして部屋に引き籠つた。だがそれも2ヶ月で幕が閉じた。

だからこの事は誰にも知られていない。親友、親戚、そして両親にモだ。

これが私が犯した人生初めての過ちだ。あやま



## 第8話・とある週末の週(後編)

今回は今までと比べると結構長い話になりました。

そして表現がまことに転がつてしまつた。

どのあたり出来ればいいか分からなかつたですが、うまくまとめられて良かったです。

とこりことで今回もじいまで読んでくださいまして本当にありがとうございます。

## 第9話・眞実へのカウントダウン

私はいつものように白雪と共に変わらぬ休日を過ごしていた。

「白雪、最近連れてきた友達に名前は付けたかい？」

今いる場所は白雪が大半の時間を過ごしている畳の部屋だ。辺りはたくさんのかわいぐるみが散らばっており、その真ん中には毛布の上に座つてぬいぐるみと遊んでいる白雪がいる。

「うん！えっとね、ゆきちゃんつていうの」

白雪は足元にあつたカピバラのぬいぐるみを持つてしゃべった。カピバラにゆきちゃんといつねー！グセンスはどうかと思つが外の世界を知らないのでは仕方のない事だ。

そもそもカピバラという動物自体、認知度が低いものだから尚更なのだろうか。

それにしても、ゆきちゃんか・・・自分の名前からやられたのか。このカピバラとゆきねえを重ねてしまつ自分がいる。名前が似ているところだけなのに。

ふと思う事がある。ここにいる白雪と私の姉であるゆきねえがもし仮にも会つてしまつたらどうなるのかど。

ゆきねえは一体私をどうするのだろうか。

警察に通報するのだろうか？それとも今までの恨みを晴らすために私を殺すのだろうか？

しかし、良い方向に転がることがない事は明白だ。

私が白雪に顔を向けると、白雪が何か田で訴えかけてくるようだった。

「パパ、どうしたの？」

「どうやら白雪は長いこと沈黙していた私の事を心配してゐるようだ。」

「あ、『じめん白雪』。ちょっと考え方をしてたんだよ。『じめん』語尾に再度『じめん』と付けて謝つた。

「ゆきちゃん、柔らかくてかわいい」

そう言つと白雪はカピバラに顔をぐりぐりと押し付けた押しつけた。正直なところ私は、カピバラはそこまでは可愛いとは思えなかつた。まだ猫の方が可愛らしいと思えた。

「そつなんだ。良かつたね」

特にこれといつて言つ事もなかつたため、私は言葉を短く切つた。白雪はカピバラから顔を放して手が空いた左手で象のぬいぐるみを取つて遊び始めた。

「しゅうくんも、ゆきちゃんと遊ぼうね」

床に向かい合つように置かれたカピバラと象のぬいぐるみは私には会話をしているようにも見えた。

白雪はしばらぐの間、その私には聞こえない自分の中の会話に入つていた。

すると、突然トゥルルと着信音が家じゅうに響き渡つた。私は白雪に「少し待つて」と伝えて、ダイーニングに向かつた。

ダイーニングに設置されている電話はまだ繋がつており、掛つてきた電話番号を見ると見覚えがあつた気がした。

私は少しためらつた後、受話器を取り耳にあてがつた。

「もしもし?」

『・・・』

私がもしもしと尋ねてから少しの間があつた。いたずら電話かと思い、通話を切つとした矢先に小さく女の声が聞こえた。

『あの・・・』

その声につられて私も言葉を発した。

「どなたですか?」

またしばらく間があつて、今度はちゃんとした返事が返つてきた。

『深雪です』

どうやら電話の主は姉だつたようだ。私は軽く安堵のため息をついて気軽に話した。

「どうしたんだよゆきねえ。そんな暗い声してわ」

『・・・ねえ、今からそっち行っていい?』

姉のその言葉で、私は田を丸くして白雪の部屋に視線をもつていつた。

「え、今から?ちょっとそれは厳しいな。今度じゃダメかな」私は姉と白雪の再会を拒むように田にちの変更を遠まわしして頼んだ。

『ダメ・・・今日じゃなきゃ。大事な話があるの』

姉は真剣を見を帶びた声でそう言った。しかしそのトーンは変わらず低いままだ。

「大事な話か・・・じゃあ、夜に家に来てくれないかな?」

あくまで白雪を姉に会わせないようにするために、私は少しでも時間稼いだ。

『今からじやなきゃだめなの。それと・・・もう家の前にいるんだ』私は耳を疑つた。そしてすぐさま窓際に移動し、カーテンの隙間から玄関の前を窺つた。

すると、下に俯いた姉が電話の耳に当てる立っていたのだ。

「家の前に?」

私はもう出来るだけ時間を稼ぐためにゆっくりと会話を続けた。

『そう、表札の前のあたりにいるわ』

姉は少し顔をあげて表札をチラと見た。

『表札の前ね・・・あつホントだ』

そう言うと姉の疲れ切った顔が私のいるカーテンに向き、私と姉の目が合つた。

『だから、もう入つていいいかな』

私は今自分に出来る最良の選択肢を考えていた。

「あ、うん・・・けど、今部屋がちょっと散らかってて・・・ごめん、5分ぐらいそこで待つてくれない!」

終わつたらすぐに中に入れるから

「うん」

もちろん私の部屋は散らかっておらず、いつものように清潔であつ

た。

しかし今考えられる時間の稼ぎ方はその程度しか思い浮かばず、姉から得られた時間はたったの5分だった。

私は「切るね」といい電話を切り、すぐさま白雪のいる畳の部屋に向かった。

部屋の中に入ると白雪が未だにぬいぐるみを使って遊んでいた。

私は表情を出来るだけ笑顔にした。しかしそれは引き籠った笑顔だったのかもしれない。

白雪がキヨトンとした表情で私を見て、ぬいぐるみを動かしていた手を止めた。

「いいかい白雪、少しの間この部屋を出ないでくれ。それと静かに遊びなさい」

白雪は返事を返すわけでもなく変わらぬ表情でうんと頷いた。

「白雪、トイレスは平氣かい?」

私は白雪の向かい側にあるトイレスを指さして言った。

手にぬいぐるみを持った白雪はは回じよつづりと頷いた。

「そうか、じゃあ静かにしてるんだよ」

私はそう言って白雪の部屋の扉を開ざした。

時計に目をやるとちょうど5分が経とうとしていた。

私はいかにも急いで掃除をしたかのように、玄関の扉を勢いよく開けた。

まだ寒さの残る外の空気と共に、姉は無言のまま家中に入ってきた。

私もその異様な空気を察し、無言で姉をダイニングへと連れて行つた。

スタスターとダイニングへと付いてきた姉は、私に何を言われる前に椅子に黒いコートを掛けて座つた。

私はお茶を入れるためにお湯を沸かし始めた。

誰もしゃべらないこの空間で私は急須から湯呑にお茶を注いでテーブルに持つていこうとした。

しかし、その沈黙は姉が重たい口を開けてを破られた。

「将ちゃん・・・私ね、妊娠したみたい」

私はびっくりして両手を持っていたお茶を落としそうになつた。そしてそう言った姉のお腹を見た。

まだお腹は大きくなつておらず妊婦と言える感じではなかつた。

「妊娠・・・いつ分かつたんだ?」

私は湯呑をテーブルに置いて出来るだけ冷静にそう言った。

「ええと、なんか4日前ぐらいに生理が遅れてるなつて思ったのね。それで前に将ちゃんとしたことがあつたじやない、それでもしかしてつて思つて妊娠検査薬を買ってきて試したんだけど。結果が陽性だったの」

姉は右へ左へ目を泳がせながらそつと語つた。

「妊娠何週目ぐらいか分かるか?」

良く考えれば分かるような事を私は聞いた。あくまで冷静に見えるのは外の自分の身だ。

「よくは分からぬけど、たぶん9週目ぐらいだと思つ」

言われてみれば私が姉とした日からそのぐらいに時間が流れていた。

私は深刻な表情をして口を噤んだ。

「どうして妊娠しちゃつたのかな、あの日は平氣だと思つたのに。しかも、将ちゃんと」

姉はまだ大きくなつていないうらお腹をさすりながら、無機質な声でそう言つた。

「どうしたらいいか分かんないよ・・・」

姉は顔の前に手を持ってきて泣くそぶりを見せた。しかし目をからは涙は流れおらず、頬を伝うものは何もなかつた。

「で、单刀直入に聞くけど・・・その子はどうするの? ゆきねえ・・・

・

私は姉のおなかに視線を投げかけて言つた。またもやしじばらくの沈

黙が流れた。

沈黙に耐えられなかつた私はそれを破つた。

「ゆきねえ・・・その子を産むの、それとも中絶するの?」

あまり言いたくない言葉ではあつたけど敢えて私は中絶といつ言葉を強調した。

「中絶・・・」

姉は何もない中空に向かつてそつ吐いた。今の姉の表情からは何も読み取れなかつた。

私は何も言わないので姉に対していらつきを覚えて、少し声を張り上げた。

「何も喋らなければ決まらないんだよ。ゆきねえはどうしたいの?姉は少し目を閉じて何か考えるそぶりを見せた後に目を開いて自分の気持ちを言った。

「私は・・・この子を産みたい」

「じゃあ聞くよ、この子を産んでどうしたいの?誰が育てていくの?」

私は今ある問題点の一部を姉にぶつけた。

姉は荒んだ顔で言った。

「この子はきっと静奈の生まれ変わりなのよ。だから私はこの子を産みたいの」

今の私には姉は少し壊れているようにも見えた。何かに取り憑かれているかのようだ。にじみ出るやうに口元から漏れる言葉が、

「何言つてるんだ。その子はその子で静奈ちゃんは静奈ちゃんだよ。代りなんていないじゃないか」

「うるさい!この子は静奈なのよ。きっと死んで私の元に戻つてくれたのよ」

姉が急に声を張り上げたものだから私はとても驚いた。

「ゆきねえ、一回冷静になりなよ!」

私が強く言い返すと姉は静かになつた。

「・・・そうだよね、死んで戻つてくるなんてありえないよね・・・

「めん」

「で、ゆきねえはその子を産みたいの？」

湯呑から立ち上る湯気が減つて、温くなつたお茶を喉に流し込んだ。

「私は、産みたいと思つてる・・・けど」

「けど？」

私はお茶をテーブルに戻した。

「この子はたぶん産めない。だつてこの子の親はあなた私の兄妹だもの」

水をうつたかのように静まつた家の中は、きっとある一室の人間だけしか会話ををしていなかつただろう。

「・・・そうだな」

「だつて私はこの子に辛い思いをさせたくないもの。・・・だから

私はたぶんこの子を堕ろすと思つ」

初めて姉がここにきてちゃんとした意見を言った。

「じゃあその子は堕ろすんだな。それでいいんだな？」

私はあくまで非情に念を押した。

「ええ・・・また今度、整理がついたら病院に行きましょ

姉はそう言つと立ち上がつてこいついた。

「もう帰るけど、その前にトイレに行つてもいい？」

私は姉にトイレの場所を教えて行かせた。コートを羽織つた姉はスタスタと私の視界から消えて行つた。

もう姉についていく気力がない私はそこでただ座つていた。

結局こうなつちゃつたのか・・・仕方ないよね。だつて弟と姉の間

で来た子供なんて産めないもんね。

産んだとしても周りから批判の声を浴びせられてこの子もとつても辛い思いをしちゃうから。

私が苦しむのなら問題がないのだけれどこの子も苦しむなんて耐えられない。

そうなるぐらいだつたらまだ愛情がわかないうちにこの子を・・・。私は弟に教えられたように廊下を歩いてトイレに向かつた。教えられたところを曲がつてみると右と左にドアがあつた。弟には左のドアと教えられていたので私は左側の扉を開けてトイレに入つて行つた。

トイレを済ました私はそのまま玄関に向かおつとした。その時、前に弟が言つていたギターの話を思い出した。

昔からずっとギターをやつていた弟は今でもやつているのならともう上達したのだろうと思つていた。

そしてやつきのダイニングにギターがなことじりを見ると他の部屋に置いてあるのかなと思つた。

前々から弟の家には興味があつたので私は興味本位で田の前のドアを開けることにした。

私がドアノブに手を触れると、中から声が聞こえた感じがした。

私はその事を疑問に感じた。なぜ中から声が聞こえるのかと・・・。暫く考えて私は扉に耳をそばだてた。すると、先ほどよつぱつきりと声が聞こえたのだ。幼い女の子の声が。

疑問が確信に変わつた。この扉の中には女の子がいると。

私は躊躇わざにその扉を開けた。扉はギィといつ音をたてて開いた。そして私が見た光景は、ぬいぐるみを持つて遊んでいる女の子が畳の上に座つている光景だつた。

「・・・あなたは、誰なの?」

震えた声で私はそう言つた。

すると田の前の少女は明るい声でひつ言つた。

「私は白雪」

私には今日の前で何が起きているのか分からなかつた。なぜこの家に子供がいるのか。

「白雪ちゃん? なんでこんなところにいるの?」

少しおかしな名前を口にして私は少女に近づいた。

「なんで？・・・」

少女はきょとんとしていて質問の意味を考えていた。ビーハヤリよく分からなかつたようだ。

「新しいお友達？」

少女は意味が分からぬことを言つた。今度は私がよく分からなかつた。

「新しいお友達！」

そう言いながら田の前の少女は私に飛びついてきた。本当に今何が起きているのかよく分からなかつた。

「え？ ちょっと、どういうこと？」

私はとりあえず弟のいるリビングに行くことにした。  
体を180°回転させてリビングに歩こうとする少女が私のコートの裾を引っ張つた。

「白雪、行く」

ぬいぐるみを持つた少女はそう言つて口を噤んだ。

私は少女が後ろにくつついてきてくるまま弟のいるリビングに歩いて行つた。

はあ・・・そろそろゆきねえも帰つたかな。とりあえず、白雪を見に行こうかな。

私は椅子から立ち上がり廊下に出るために開き戸のドアノブに手を掛けようとした。

その時、自分がドアノブを回したわけではないのにドアノブが回つた。つまり自分の以外の誰かがドアノブを回したということだ。  
今考えられる人物は姉か白雪だけだが、これが白雪でないことは確かだ。

つまり、今扉を挟んでの前にいる人物は姉という事になる。

私は扉が開く前にぶつからないように距離をとつた。

そして扉があいて目の前にあつた光景は・・・。

なんと田の前には姉とその実の子供である白雪<sup>ホワイト</sup>がいた。とたんに私の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「ちょっと、これどうこうことなの？」

姉が白雪を自分の前に引っ張つて言った。

「えっと、その子はね・・・」

私は出来るだけ平静を装つて会話しようとした。だが顔が青ざめているのは自分でも分かつた。

「だから誰なのよ？」

「その子はね・・・言いづらいんだけどや」

最善の答えを頭で駆け巡らせた結果、この答に至つた。

「実は・・・バツ一の子持ちなんだよね。黙つて『ごめん』

嘘をついたからにはその言葉を真実にしなくてはならない私は次の言葉を考えた。

「それ本当？」

姉は疑いの目を強くした。

人は嘘をつくとその証拠をたくさん相手に伝えようとするものだ。

「本当なの？じゃあこの子の名前は何？」

私は姉の隣にいる白雪をチラと見て言った。

「その子は白雪っていうんだ」

「白雪？珍しい名前ね」

姉は自分の裾を引っ張つてる白雪の手を取つて頭を撫でた。

「じゃあこの子の母親はどう行ったの？」

「それは・・・」

その質問を考えていなかつた私は、頭をフルに回転させた。

「あんまり言いたくないんだけど、その、言い争うになつてさあ・・・」

・

出来るだけあり得るような離婚原因を述べた。

姉は納得しきれていないようだったが、先程と比べると疑問の色が晴れてきた気がする。

「やうなの・・・じゃあ念の為に父さんに訊いてみるわ」

そう言つと姉は後ろのポケットから携帯を取り出して手早く電話をかけた。

今ここで姉が父に電話をかけるとすぐでがここで分かつてしまつ。つまり、今まで私がやつていたことが水の泡になり一人寂しく刑務所暮らしが始まることになる。

私はそれを避けるために今自分が出来る事を考えた。まず最初の思いついたことが、今ここで姉を殺して死体を隠す手段だ。

しかし、その方法ではすぐに足が付いてしまい結果は同じになつてしまつ。

次に思いついたことが父には何も伝えていないで産んだ子供で妻は蒸発してしまつて消息が分からぬといふことだ。

まだこの方法ならば実行可能かもしれない。だがこれも成功する確率は低い。

「もしもし、父さん。今将太の家にいるんだけど、将太つて・・・え? 今からこっちに来るつて?

なんで、父さん。・・・あ、切られた

「どうした?」

「えつ、なんか父さんがここに来るつて。理由は分からないけど」姉は携帯を元入れてあつたポケットに戻した後、肩をすくめてみせた。

私は、今この状況で父がここに来る事に驚きを覚えた。なぜ急にそんな事を言い出したのか、

姉とのやり取りに頭を使つている私には分からなかつた。

「じゃあ私はまたそこで座つてるから」

そう言つと姉はいつも白雪が座つている椅子の腰を掛けた。

「とりあえず待ちましよう」

そう言って、姉は私が下げるのを忘れていたお茶を飲んだ。私は白雪をソファに座らせ、父親が家に来るのを待つた。

父親が来るまでは姉は一切喋らず、この空間で声を発していたのはあどけない声の白雪だけだった。

私は相槌を打つだけでまともな会話をすることことができなかつた。そして、真実へのカウントダウンが刻一刻と迫つてくるのであつた。

## 第9話・眞実へのカウントダウン（後書き）

さて、このお話も次で最終回になるかと思います。

そんなことで「楽しみにしてください」とは言えませんけど、頑張つて書きます。

そして試験が1週間切りました。それとも頑張りますので、次回の更新が少し遅れるかもしれません。

といつ事でまた会いましょう。

私は今まで父親を殺す術だけを考えていた。  
小、中、高校生を通してその術を考えた挙句、私はたくさんの殺害方法を思い付いた。

ありきたりで絶対に誰がやったのか分かるような殺人。または誰にも気づかれない完全犯罪。

そして何度もそれを実行に移そうと試みた。

しかし、結果はいつも失敗。必ず最後には理性が邪魔をして父親を死に至らしめる事ができなくなる。

そんな事を延々と繰り返して、いつしか私は大人になっていた。  
しかし大人になつた今でも父親への憎しみは消える事がなかつた。  
憎しみというよりも、ただ殺人に興味があつただけなのかも知れな  
いが。

だが、転機は訪れた。

なんとあんなにまで殺したくて仕方がなかつた父親が死んだのだ。  
私の前でばたりと倒れて・・・。

死因は脳に血栓が原因となつた脳卒中。

父親が大のタバコ好きでかなりのヘビースモーカーだつた。  
きっとそのタバコが原因で死に至つたのだと思われる。

話によると喫煙者と吸つていない人では脳卒中になる確率が4倍も違つうらしい。

そして、あれほどまでに殺したがつていた父親が死んだわけだが、  
私に残つたのは虚無感だつた。

父親が死んだことに対するスッキリするどころか何も得られなかつた。

今までの目標を達成したのにも拘らず幸福や快感は訪れなかつたの

には意味があつたのかもしれない。

今となつてはそれは分からぬことなのだが。

だがそんな虚無感の中から一人の女性が私に手を差し伸べてくれた。その女性はとても優しく幼いころ私が見ていた母親に似ているような気がした。

そして長いことその女性と付き合つてから、いつしかめでたく婚姻届を出していた。

その日々はとても楽しかつた。きっと今までの人生と比べると天と地ほどの差があるのでないかというぐらいだ。

単に父親がいなくなつたからというのもあるのかもしれないがとても幸せだった。

そんな幸せの中、私たちに朗報が舞い降りた。

なんと妻が子供を妊娠したのだった。

私はその事にとても歓喜した。妻も当然その事に喜び私たち夫婦の中は深くなり一方だった。

しかし、妊娠6週を越えたあたりから赤ちゃんの心拍が確認できなくなつてしまつた。

妻のこの症状は、医師の診断によると稽留流産けいりゅうりゅうさんといつものらしい。稽留流産というのは、赤ちゃんが死んでしまつていてるのに、子宮の中に留まつて出てこない状態の事を言つらしい。

そして妻は泣く泣く子供を外に出すために子宮内容除去手術を受けました。

きっとその子供はまだ人の形をなしていなかつたのだと思われた。だが、どんな姿形をしていようとそれは紛れもなく私達の子供だった。

しかし、一度死んでしまつた者は還つてこない。これは誰から見ても明白だ。

そのため私達はもう一度だけ赤ちゃんを産もつと決意した。

私達はその間、出来るだけ笑顔の絶えない家庭を作つた。

そして、見事に妻は新しい命をお腹に宿したのであつた。

結果、またもや赤ちゃんは稽留流産。医師が言つたはこれは体质だ  
そうだ。

妻はひどく悲しんだ。もちろん私もだ。

私は妻に体外受精を勧めたが、妻はそれを断固として拒否した。  
そんな今にも崩壊寸前な状態がしばらく続いたある日。

家をしばらく出ていた妻が帰ってきたのだった。

一人の赤子を連れて・・・。

妻に訊くと「私の子供だ」というだけで他に何も言わなかつた。  
どうやつてその子供を連れてきたのかは分からなかつたが妻は警察  
に捕まることはなかつた。

そしてその一人の赤子はすくすくと成長していった。

そり、その男の子と女の子の子供はすくすくと

そしてだいぶ時間が経つた頃に家の中にチャイムが響き渡つた。

「来たみたいだね、父さん」

姉はずつと変わらない表情のまま椅子の腰を腰を掛けっていた。

私は白雪をダイニングに残して玄関へと向かつた。

玄関の扉には狭いスモークガラス越しに人影が見えた。体格から言  
つて父で間違いないと思われる。  
私は迷わず扉を開けた。

そこにいたのは黒い鞄を持つた父だつた。父は何故か神妙な表情を  
しており、いつもと違つた様子だつた。

「久し振りだな。将太」

父は手を軽く挙げて言つた。

「久し振り。父さん」

私は出来るだけ表情を柔らかく返事をしたが、玄関にかかっている

鏡に映る自分の表情をビートなく引き攣つていつにも見えた。

「とりあえず入つてよ」

私は父に靴を脱ぐように促して父を家に迎え入れた。

「お邪魔するよ」

そう言つと父は礼儀正しく靴をしつかりと揃えて立ち上がつた。

「ゆきねえは奥にいるから」

視線をダイニングに一瞬持つていつて言つた。

「そりか」

父は軽くしわがれたような声で短く言葉を切つた。

「えつと、じゃあ・・・行こうか」

私は姉と白雪のいるダイニングにゅうくりとした足取りで歩いて行つた。

父も同じような歩幅で後ろから付いてきた。

そして私はダイニングの扉を開けて中に入った。

とうとうこの時がやつてきてしまったのかと思いながらも周りを見渡した。

部屋の中には変わらず姉が椅子に腰を掛けており、白雪は私が新しく買ったカピバラの『ゆきちゃん』と遊んでいた。

「父さん・・・」

姉はそう言つて私の方に視線を向けた。しかし視線は私ではなく、私の後ろにいる父に注がれていた。

「深雪か」

「じゃあ父さん、そこに座つてて」

私は部屋の壁際にもたれかかつて、父は鞄と共にソファに腰を掛けた。

そして姉は堰<sup>せき</sup>を切つたかのように話し始めた。

「じゃあ訊くけど、父さん。将太は私が知らないうちに結婚してたの？」

如何にもストレートな訊き方だった。しかし、それが一番疑問になつてゐるのだから仕方ない。

「・・・いや、将太の結婚は何も知らない」

父のゆづくりとした返事が終わった後、姉はきつい目つきで私を睨んだ。

「どうこういとなの？説明して」

私は出来るだけ考える素振りをしないように答えた。

「・・・父さんに黙つてたのは本当にすまないと思つてゐる。けど・・・」

「けど、何なの？」

「けど・・・けど、本当にこの子を産んで良かつたと思つ」

嘘の演技。何も分からぬ私にはそんな事は何も分からない。

「はあ？あんた何言つているの。子供に愛情をかけるのは当たり前でしょ」

それを・・・それを奪われた私はどれだけ悲しんだと思つてゐるのー。怒りに身を任せている姉に対して、父は物静かに座つていた。

「・・・」

私は姉に気押されて黙つてしまつた。

「父さんになんか言つてよ」

姉がそう言つと父は重たい口を開いた。

「なあ・・・私がここに来た理由が分かるか？」

父と私を見た姉は眉をひそめた。

「父さんも何言つてるの？」

父は自分の前で手を組んで下の方を見ていた。

「分かるわけないな。じゃあ順を追つて説明しなければいけないな

「だから父さん何言つてるの」

私は姉に止められているかのように何も喋れなかつた。

「お前たちに言わなければいけないことがあるんだ」

また部屋の中がしんと静まり返つた。聞こえる音は白雪がカピバラを動かす音だけだ。

「何？」

「それはだな・・・」

父は少し間をおいた。その時間がやけに息苦しく感じられた。

「お前たちの親の話なんだが」

私は姉に代わって話し始めた。久し振りに話した私の喉は乾いて少し痛かった。

「お前たちの親つて・・・父さんでしょ、何言つてるの？」

話がよく見えなかつた。これは姉にも言えることだろひ。

「実はな・・・お前たちの親は私じやないんだよ」

一瞬の間思考が停止した。だが次第にその言葉の意味が頭で処理されていった。

「・・・どうこりう意味？」

私がそう言おうとする前に姉が父に言葉を返した。

「そうだよどういうことだよ」

やはり私も姉に続いた。そして父は今まで重たかつた口が嘘のようにな話し始めた。

「今お前たちの居場所にいるべき将太と深雪は・・・母親から生まる前に死んでいるんだよ」

「え・・・何よそれ？」

「父さん、言つてる意味が分からんんだけど」

そんな異様な空気を察してか、白雪はトタトタとダイニングを行つた。

今はそれどころではない私は何も言わずに白雪をそのまま行かせた。

「お前たちは、母さんが拾つてきた子供なんだよ。正確には誘拐してきたというのが正しいんだがな。

だからお前たちの両親は別の誰かなんだ」

「ゆう・・・かい？」

姉が目を丸くして震えたような声で呟いた。

私の方はといふと、別の意味で衝撃を受けていた。

自分が本当の子供ではないという事にはあまりショックは受けずに、

ただ・・・

とうの昔に誘拐は始まつていたのだなという事に驚いた。

つまり私がこうやって今、姉の子供である静奈を誘拐して白雪として育ててきたのは私が誘拐された子供だから。

しかし、そんな事はただの戯言だ。結局誘拐したのは自分であって、

それを人なすりつけられるわけではない。

「うそ・・・そんなの嘘・・・」「

姉は体を震わせていて、目が潤みはじめてきていた。

そんな父の告白から私は一つ疑問に思った事があつた。やつを詰葉だ。

何で父はさつき「私がここに来た理由が分かるか?」と聞いたのだらうか。

今、私はこの事を言つたために来たのではないよつて感じられた。

「それが、父さんがここに来た理由……か……」

私は不思議な関係で繋がれた自分を含めた3人に視線をやつた。

いや、まだ子供で、泣いてる

私は無表情で父の言葉を待つた。

「お前たちからすれば偽の母を指すんだがな」

父は余計な言葉を付け加えた。そのせいで姉が堪えていた涙がこぼ

れおちて、類をつうと濡らした。

私が言葉を言い終らないうちに父が口を挟んだ。

「事故じゃないんだ。あれは事故じゃ」

の言葉にはさすがの私も耳を疑つた。しかし父の口調は同じままだ。

「あれはな、事故じゃなくて狙つて起こした事なんだ。順を追つて

説明するなどだな

父は饒舌に語り始めた。

「私はある運転手に頼んだんだ。私の妻を事故に見せかけて轢いてくれつて。

その運転手は金に困つていてな。だから私は妻を殺す事が出来たらその運転手の銀行に金を振り込んでやると言つたんだ。そうするとそいつは簡単に私の依頼を引き受けてくれた。そして私は約束通り金を振り込んだ。

そいつは事件が起ころる前に言つてくれたよ。「ありがと」「やれこます」とな。

そしてあの事故は起きた。・・・これがあの事故の真相だ」

そう言つと父は鞄を膝に置いてチャックを開けようとした。

「なんだよ・・・それ。なんで母さんを殺したんだよ

「何を言つてるんだ。お前たちの母親ではないんだからそんなに怒る必要はないだろう」

父は呆れたよう言つた。

「じゃあなんで殺したのかは言つてくれよ」

「そうだな・・・それだな。あの人もういな子供の幻影に縋つていいるのが、見ていたくなつた・・・

と言つた方が納得するか?」

父は全く反省しないような口ぶりでそつ言つた。

「この・・・野郎!」

私は目の前にいる男に一発拳を見舞うために殴りかかつとした。しかし、ある物が私の動きを止めた。

「これで、私がここに来た理由が分かつたか?」

父は鞄からおもむろに刃渡り20cm以上はありそうな包丁を取り出した。

「さつときつたこともあながち間違いではないんだぞ。私はその幻影を消しに来たんだから

先程まで泣いていた姉は、途端に姉は顔を引き攣らせて椅子から飛びのいた。

「やめろよ・・・

私はゆっくりと父から後ずさつた。同時に父は腰あげて銀色にギラリと光る包丁を突き出した。

「すまんな、だけど死んでくれ」

父はゆっくりと私に近づいてきた。すると、姉はテーブルに置かれている箸を入れる箱を父にぶん投げた。

「殺されるもんですか、今あんたが死んでも正当防衛で私達は罪にならないんだからね」

箸入れが見事に右手に命中したため、父は左手で当たつたところを押された。

その隙を見計らって、私は父から距離をとった。

「あまり暴れないでくれ・・・私もお前たちについていくから」  
そう言ひと父はまたゆっくりとした足取りで私達との距離を詰めていった。

その間に姉はしかしに入つた台所から包丁を持つてきた。

「・・・正当防衛よ、罪にならないの」

姉はそう繰り返して包丁を腹辺りで構えて私の前に立つた。父との距離は残り4メートル。

「深雪、それを下せ」<sup>おふ</sup>

父はそう言いながらも徐々に距離を詰めていった。距離は3メートルまで縮まった。

「いや。そうじゃないと・・・そうじゃないと」

次の瞬間、姉は包丁を構えたまま奇声を上げ父に突っ込んでいった。  
「うわああああああああああああ

秒に換算すると、とても短い時間だが父にたどり着くまでの時間はとても長く感じられた。

その長く感じられた時間。私は自分が死ぬわけでもないのに頭の中では走馬灯が駆け巡っていた。

姉と楽しく買い物に出かけた記憶。父と男の秘密と称して遊びに行つた記憶。

家族4人、テーブルを囲つて一家団欒で幸せに食事をとる記憶。

しかし、それは全て嘘偽りであつて眞実でも何物でもない。

ただ私の走馬灯は幻想といふ名の偽りの記憶を蘇らせて碎いていつたのであつた。

必死に形相で父に駆け寄る姉。それに驚いて同じく包丁を構える父。そしてそんな光景を無表情で見つめる私。

そして数秒後、鈍い音が部屋中に響き渡つた。

3

「・・・パパ・・パパ、どうしたの？」

白雪が私の肩を叩いている。

「この人たち何してるの？・・・壊れちゃったの？」

白雪は心配そうな顔で私を覗き込んだ。

「壊れちゃったんなら、パパ直してよ。パパはなんでも直せるもんね」

私は足元に横たわっている二つの死体を見下ろして言つた。

「白雪・・・パパも直せないものはあるんだよ」

白雪は半信半疑な表情で頷いた。

姉が父に突っ込んだ後、まず初めに姉の包丁が父の腹部に刺さつた。しかしその一撃は即死には至らず、まだ父には意識があつた。腹部に包丁が刺さつた父は血を流して呻きながら自分の持つていた包丁を姉に突き刺した。

執念深いとはこの事を言つのだと思つた。すると姉と父は床に倒れた。

二人とも既に虫の息だつた。そして姉は私に救急車を呼ぶように頼んだ。

だが私はそんな事はしなかつた。ただその一人を見ているだけだ。二人の意識がだんだん薄れていくのはその時の私にはよく分かつた。

そしてじぐじくと血が流れ、床を真っ赤に染めていく一人に向かってこう言った。

「ありがとうね父さん。それと・・・ゆきねえ、僕も隠し事があるんだよ――」

姉は薄れていく意識の中、必死に手を私に向けようとして助けを求めていたが、もちろんその手は上がらなかつた。

「あの子供はね、ゆきねえの子供の静奈ちゃんなんだよ」

姉は体をビクンと震わせて私を睨んだ。その眼には殺氣が籠つており、姉の全てが注ぎ込まれているようにも思えた。

そして、二人は息を引き取つた。しかし死んでもなお、姉は私を睨み続けていた。

そして私は白雪を誰にか見つからない場所に移動させ、警察を呼んだ。

私は警察署に行き事件の内容を喋つた。

私達が誘拐された子供だったこと。父が母親を事故に見せかけて殺したこと。

そして父が私達を殺そうとしたこと。

やがて私は警察署から解放された。そして私には罪は下りなかつた。ただ、大々的にニュースでその事を報道されてなんどもテレビの前に顔を出させられた。

そのため私の名前がさまざま人に知れ渡つた。

しかし私の本当の両親は現れることがなかつた。もしかしたら死んでいるんではないかと思つたが別にどうでもよかつた。

そして月日が経つごとに私は世間から話題にされなくなつていった。それからさらに長い年月が経つていった。

高校生ぐらいの一人の少女が私のアレを淫らに咥えている。

少女の口から唾液が垂れて私のアレを濡らしてテカテカと光らせた。舌を慣れたようにアレに這わせている少女は途切れ途切れの声で言った。

「パパの・・・おいしいよ・・・もつと・・・気持ち・・・よくなつてね」

少女はさらに激しく頭を上下に振った。私は少し息を荒げた。

その行為に疲れた少女は、私から少し距離を取つてガバリと足を開いた。

「パパのが欲しいよ・・・」

少女は自分の秘部を優しく撫でながらそう言つた。

私は少女に近づいて、愛液が垂れているピンク色をした秘部を軽くなぞつた。

すると少女は喘いで体を震わせた。

「・・・はやく・・・」

私は無言のまま少女の秘部にアレを突き立てた。すると少女は至福の笑みを浮かべて腰を動かした。

「ねえ、パパ。もつと気持ちよくなろうね」

そう言つと少女は「あつ」と喘いだ。私が強くアレを押し込んだからだ。

普通ではありえない関係。親と子の行為。

しかし、私達は親子ではないのだ。だからこの行為は誰にも咎められないことはない。そう、誰にも。

「そうだね。もつと気持ちよく・・・白雪」

私は微笑して、さりげに白雪と深く交わつた。

## 第10話・最後の告白（後書き）

さて、これでこの『箱入り娘』も最終回を迎えるました。

長じようで本当に短く感じられました。期間的にもちょいびーか月ぐらいですね。

そして、最後はうまくまとめられなくてすいませんでした。その点は次回作で改善します。

それと次回作の事なんですが、たぶん私のもう一つの作品である『姉妹と静けさと音』の続編をやると思います。

たぶんジャンルは推理なのでもし気になつたらよろしくお願ひします。

それとこのお話で思つたんですけど、やつぱり嘘などはいけないのかなと思いました。

でも、優しい嘘とかは大切ですよ（笑）

とこうの事でここまで見て貰った方、本当にありがとうございました。

これにて、つかのとある茶番劇を終了いたします。

2度目ですが、本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9893f/>

---

箱入り娘

2010年10月11日21時41分発行